K-634

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書　第24集

市内遺跡発掘調査報告書(12)

問答山(もんどやま)遺跡の調査

塔ノ下(とうのした)遺跡の調査

他

2004年

長井市教育委員会

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書　第24集

市内遺跡発掘調査報告書(12)

問答山（もんどやま）遺跡の調査

塔ノ下（とうのした）遺跡の調査

他

平成16年 3 月

長井市教育委員会

序

昨年は長井市内においてダム工事に関連する事業や土地改良に起因する大規模な発掘調査が㈶山形県埋蔵文化財センターにより実施され、高蹴遺跡では縄文時代の落し穴遺構が列をなして発見され、址上遺跡では溝で区画された平安時代の建物跡が検出され貴重な発掘成果が伝えられています。これらの発見の発端となったのは平成３年度以来実施してきた分布調査と本事業である市内遺跡発掘調査が重要な役割を果たしてきていると言っても過言ではありません。

今年度に実施した調査は５件と少数でしたが、開発に伴う遺跡の問い合わせは20件を超えています。この数は平成15年度に実施する開発事業の他に、近い将来行われる土木工事や土地取引に伴い埋蔵文化財の有無を明確にしたいという大手金融機関や不動産関係者からの問い合わせも含まれています。このことは数年後に開発工事の構想が描かれたことを意味し、それに伴って試掘調査や発掘調査の必要性が迫っていると受け止めることもできます。

大規模な公共事業が減少した現在でも、個人の宅地造成をはじめ様々な民間開発が計画されています。開発と遺跡保護を円滑に進めるためにも開発事業者の方々にご理解をいただきながら本事業の継続に努めてまいる所存でございます。

最後になりましたが、本調査にご理解とご協力をいただいた方々、また、厳しい天候にもかかわらず調査に参加いただいた皆様に心より感謝を申し上げます。

平成16年３月

長井市教育委員会

教育長　竹　田　辰　雄

例　　言

1．本報告書は、長井市教育委員会が国庫補助を受けて実施した、平成15年度の開発事業における調整並びに遺跡台帳整備に関する市内遺跡発掘調査の報告書である。

2．事業期間は平成15年４月１日から平成16年３月31日までである。

3．調査体制は次のとおりである。

調　査　員　岩崎義信（長井市教育委員会　文化生涯学習課　補佐）

調査参加者　安部国蔵、上村欣三郎、桑原甚一、佐野昭夫、孫田長市、高橋勝太郎、高橋信一、高橋政男、玉置吉次、長岡　登、中島　清、曳地栄蔵

事　務　局　事務局長　中川輝男（長井市教育委員会　文化生涯学習課　芸術文化主幹）

事務局長補佐　村上和雄（長井市教育委員会　文化生涯学習課　補佐）

事務局長補佐　岩崎義信（長井市教育委員会　文化生涯学習課　補佐）

事務局員　安部しのぶ（長井市教育委員会　文化生涯学習課　主任）

平成15年12月１日～

事務局員　吉川幸代（長井市教育委員会　文化生涯学習課　主事）

資料整理　高世博美、樋口有美、齋藤宏美（郡山女子短大博物館実習生）

4．　本調査を実施するにあたり、次の方々にご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

（順不同、敬称略）

山形県教育庁社会教育課文化財保護室、株式会社ダイナム、安部善博、高橋政男、布施真喜人、高橋直子

また、報告書を作成するにあたり次の方々からご指導・ご助言を賜った。

㈶山形県埋蔵文化財センター、佐藤正俊、渋谷孝雄、水戸部秀樹、菅原哲文

5．遺構・遺物の縮尺は住居跡1/60、炉跡1/30、土坑1/50、土器実測図1/4、石器実測図1/2としたが、一部変則的なものはそれぞれスケールで示した。

6．本書の編集・執筆は岩崎義信が担当し、拓本は古代の丘資料館長 椎名勝彦、挿図・図版の作成は高世博美、樋口有美の協力を得た。

目　　次

Ⅰ　調査に至るまで …… 1
　1．調査の目的 …… 1
　2．調査の方法 …… 1
　3．調査の経過 …… 1
Ⅱ　開発事業に係る調査 …… 4
　1．稲荷前遺跡 …… 4
　2．館遺跡 …… 5
　3．塔ノ下遺跡 …… 6
　4．本宿東遺跡 …… 9
Ⅲ　遺跡台帳整備に係る調査 …… 10
　5．問答山遺跡 …… 10

報告書抄録 …… 巻末

表　目　次

第１表　調査工程表 …… 2
第２表　剥片計測表 …… 23

挿図目次

第１図　調査箇所位置図 …… 3
第２図　稲荷前遺跡概要図 …… 4
第３図　館遺跡概要図 …… 5
第４図　塔ノ下遺跡概要図 …… 7
第５図　塔ノ下遺跡 …… 8
第６図　本宿東遺跡概要図 …… 9
第７図　問答山遺跡トレンチ概要図 …… 10
第８図　問答山遺跡概要図 …… 11
第９図　土層図 …… 12
第10図　問答山遺跡遺構配置図 …… 12
第11図　１号住居跡 …… 13
第12図　１号住居跡出土土器（１） …… 15
第13図　１号住居跡出土土器（２） …… 17
第14図　１号住居跡出十土器（３） …… 18
第15図　１号住居跡出土土器（４） …… 19
第16図　１号住居跡出土石器（１） …… 20
第17図　１号住居跡出土石器（２） …… 22
第18図　剥片の接合資料及び計測と長幅図 …… 23
第19図　２号住居跡 …… 24
第20図　２号住居跡複式炉 …… 25
第21図　２号住居跡出土土器 …… 27
第22図　２号住居跡出土土器・石器 …… 28
第23図　１号炉跡 …… 29
第24図　１・２号土坑 …… 29
第25図　包含層出土遺物 …… 30

図版目次

図版１　稲荷前遺跡 …… 4
図版２　館遺跡 …… 5
図版３　塔ノ下遺跡遠景 …… 6
図版４　塔ノ下遺跡 …… 8
図版５　本宿東遺跡 …… 9
図版６　問答山遺跡（１） …… 31
図版７　問答山遺跡（２） …… 32
図版８　問答山遺跡（３） …… 33
図版９　問答山遺跡（４） …… 34
図版10　問答山遺跡１号住居跡出土土器（１）・ 35
図版11　問答山遺跡１号住居跡出土土器（２）・ 36
図版12　問答山遺跡１号住居跡出土土器（３）・ 37
図版13　問答山遺跡１号住居跡出土土器 …… 38
図版14　問答山遺跡１号住居出土石器 …… 39
図版15　問答山遺跡２号住居跡出土土器 …… 40
図版16　問答山遺跡出土遺物 …… 41

Ⅰ　調査に至るまで

1．調査の目的

本市では昭和57年から行った遺跡詳細分布調査を発端にし、市内全域にわたる分布調査を実施してきたところ現在まで216箇所の遺跡を把握しているが、近年時代の要求に伴い、遺跡が存在する地域にも開発がおよぶようになってきた。本調査は開発事業との調整を図り、事前に遺跡の保護にあたることを目的としたものである。対象となる開発事業の内容は本市が行う公共事業と、宅地造成をはじめとする民間開発事業が主体となる。

また、周知の遺跡はそのほとんどが表面踏査で確認したものである。そのため遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにする目的から一部試掘調査を実施し、記録として保存にあたり遺跡台帳の整備に努めた。

2．調査の方法

調査は内容・目的から次の方法で実施している。

（1）現地踏査

遺跡の周辺が開発範囲に含まれる場合や、現在遺跡として登録されていない地域でも、開発事業予定区域が広範囲におよぶ場合には現地踏査、聞き取り調査を行い遺跡の有無の確認にあたり、開発事業と遺跡保護の調整にあたる。

（2）試掘調査

周知の遺跡が開発事業予定区域に含まれる場合や、遺跡周辺に開発がおよぶ恐れがあるときには坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺構・遺物の広がりを確認し、さらに遺構検出面までの深さを把握し開発事業と遺跡保護の調整を図る。

また、遺跡台帳整備の目的から、これまで表面踏査による推定遺跡範囲に坪掘りやトレンチ掘り、小規模な発掘調査を行い遺構・遺物の検出にあたり遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにし、遺跡台帳の補筆にあたる。

（3）立会調査

開発事業において遺跡におよぼす影響が軽微な場合は、工事施工に立ち会って調査を行う。発見された遺構・遺物は記録保存を行う。

3．調査の経過

長井市教育委員会では、これまで行ってきた分布調査をもとに遺跡地図を作成しており、この地図を開発を担当する関係機関に配布し、今後計画される各種開発事業にさきがけて埋蔵文化財に関するヒアリングを行い、必要に応じ上記の調査を実施した。また、民間開発についても随時受付を行っており、開発に係る事前調査依頼の受け入れ態勢を組織し、同様の調査を行った。

その結果、本年度は５遺跡の調査を実施した。内訳は民間開発に係る調査が４件、遺跡台帳整備に関する調査が１件で、公共事業に係わる調査の依頼は該当するものがなかった。民間開発が増えつつあるのが現状である。

なお、現地調査の工程と、ヒアリングに係る調査の内容は次のとおりである。

調 査 工 程 表

日程 / 内容	平成15年									平成16年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
試掘調査												
発掘調査												
報告書作成												

埋蔵文化財ヒアリング一覧

事業種別	遺跡名	調査区分	種別	時期	備考
個人宅地造成に係る調査	稲荷前遺跡	試掘調査	包蔵地	縄文時代	民間開発
	館遺跡	試掘調査	包蔵地	縄文時代	民間開発
	本宿東遺跡	試掘調査	包蔵地	近世	民間開発
大規模開発に係る調査	塔ノ下遺跡	試掘調査	集落跡	奈良・平安	民間開発
遺跡台帳整備に係る調査	問答山遺跡	発掘調査	集落跡	縄文時代中期	

調査箇所一覧

No	名　称	種　別	時　期
1	稲荷前遺跡	包蔵地	縄文時代
2	館遺跡	包蔵地	縄文時代
3	塔ノ下遺跡	包蔵地	奈良・平安時代
4	本宿東遺跡	包蔵地	近世
5	問答山遺跡	集落跡	縄文中期

第１図　調査箇所位置図

Ⅱ　開発事業に係る調査

1．稲荷前（いなりまえ）遺跡

所 在 地　長井市下伊佐沢地内

調査期間　平成15年４月７日

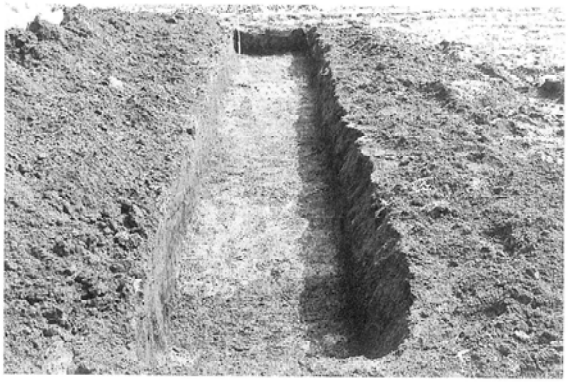
起因事業　個人宅地造成

遺跡環境　長井市街地の南東部、出羽丘陵南端部の西側に位置し、昭和63年の分布調査で発見された縄文時代の遺跡である。南に向けて開けた盆地状の平地には城館跡をはじめ多くの遺跡が点在する。

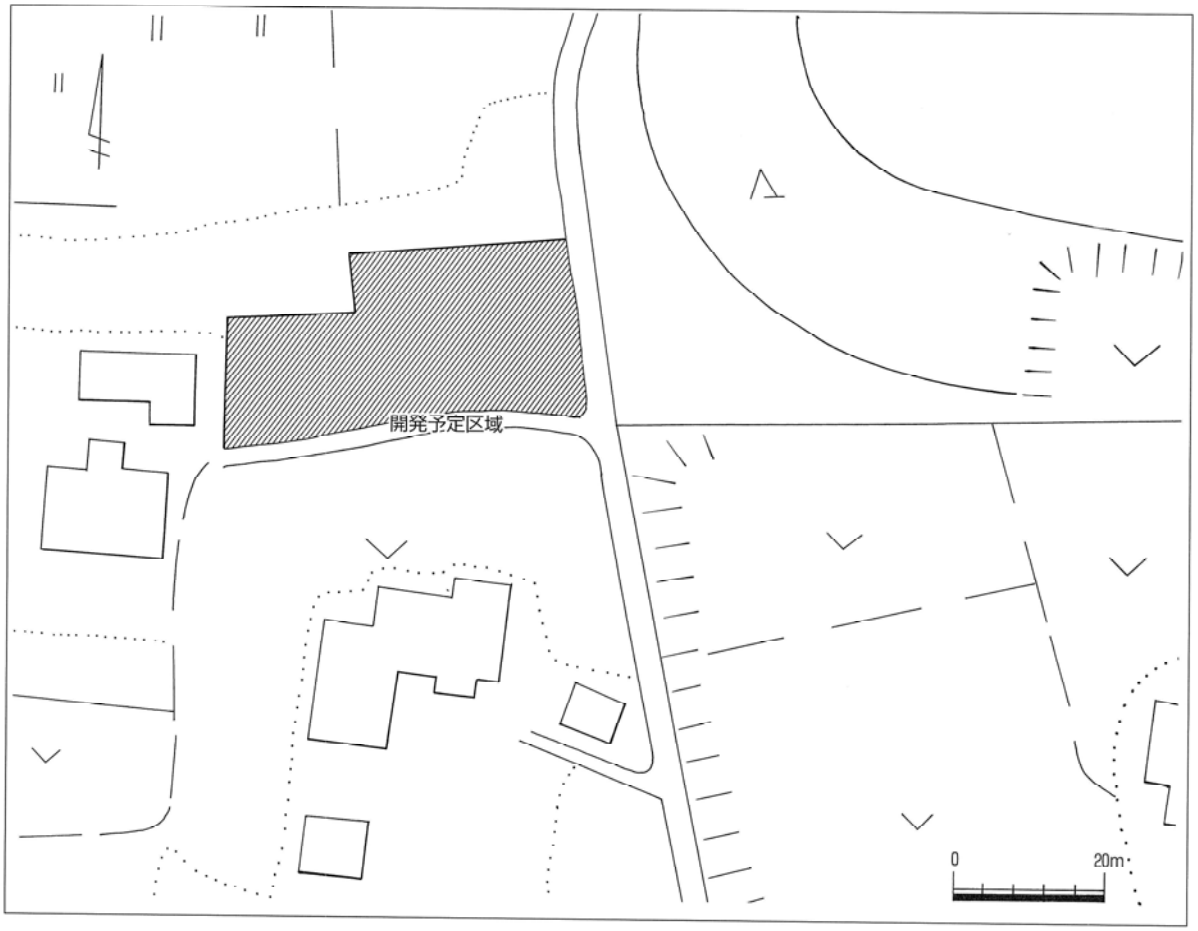
調査状況　開発予定区域に1.2×10ｍのトレンチを任意に２箇所設定し、地山層まで重機を用いて掘り下げを行い遺構・遺物の検出にあたった。

調査結果　地山層まで60㎝の深さであったが耕作による撹乱が多く見られ、遺構・遺物は検出されなかった。本造成工事が遺跡におよぼす影響はきわめて少ないものと考えられる。

調査区近景（上）　１トレンチ（下）



図版１　稲荷前遺跡



第２図　稲荷前遺跡概要図

2．館（たて）遺跡

所 在 地　長井市中伊佐沢地内

調査期間　平成15年10月30日

起因事業　個人宅地造成

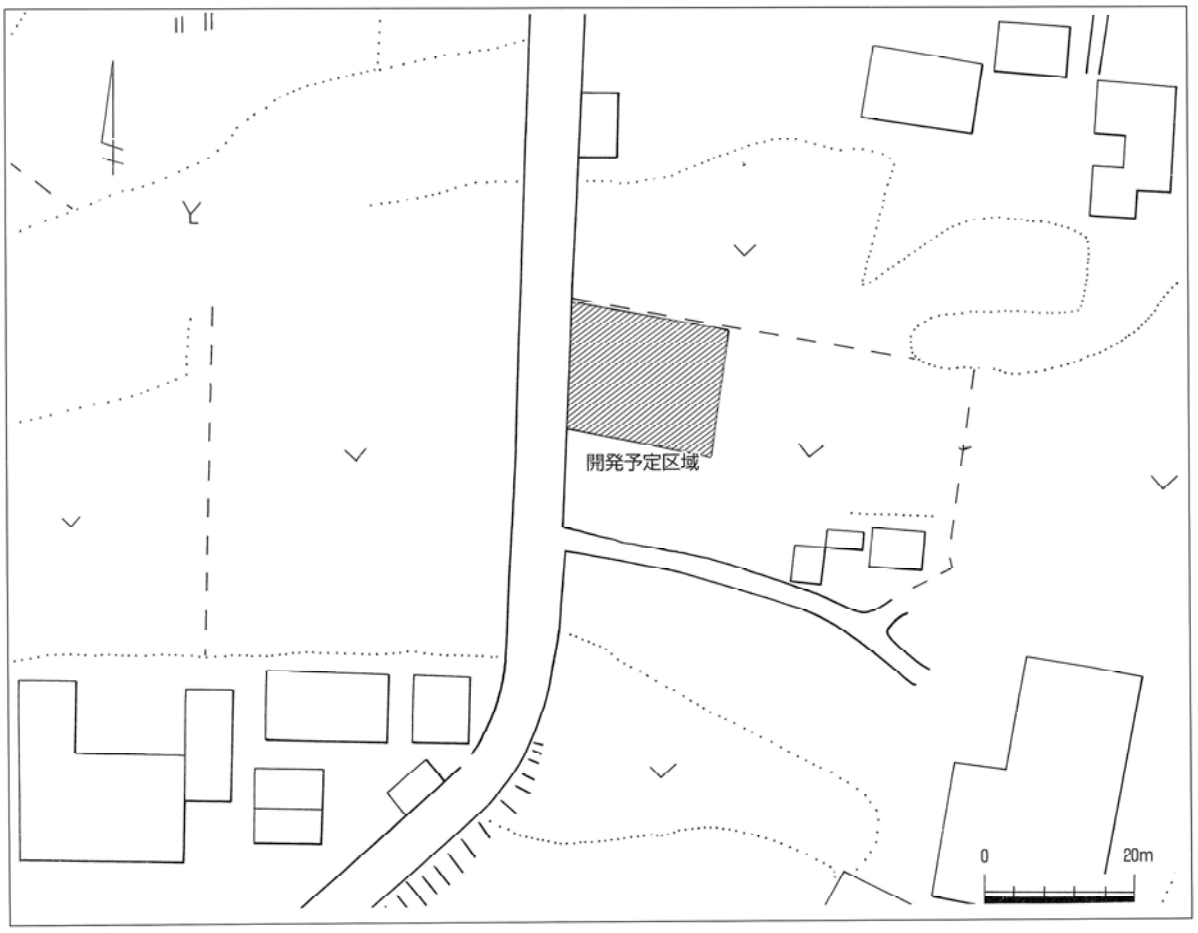
遺跡環境　稲荷前遺跡の北方約2.4㎞の地点に位置し、昭和63年の分布調査で発見された縄文時代の遺跡である。遺跡の東側には戦国時代に当地を支配した伊達の家臣桑島将監が永禄13年に妻と子供を亡くし、菩提をともらうため開いた玉林寺があり、石碑も伝わっている。

調査状況　開発予定区域に１×８ｍのトレンチを任意に２箇所設定し、地山層まで人力で掘り下げを行い遺構・遺物の検出にあたった。

調査結果　地山層まで50㎝の深さであったが耕作による撹乱が多く見られ、遺構・遺物は検出されなかった。本造成工事が遺跡におよぼす影響はきわめて少ないものと考えられる。

調査区近景（上）　１トレンチ（下）

図版２　館遺跡



第３図　館遺跡概要図

3．塔ノ下遺跡

所 在 地　長井市成田地内

調査期間　平成15年11月26・27日

起因事業　遊技場造成工事

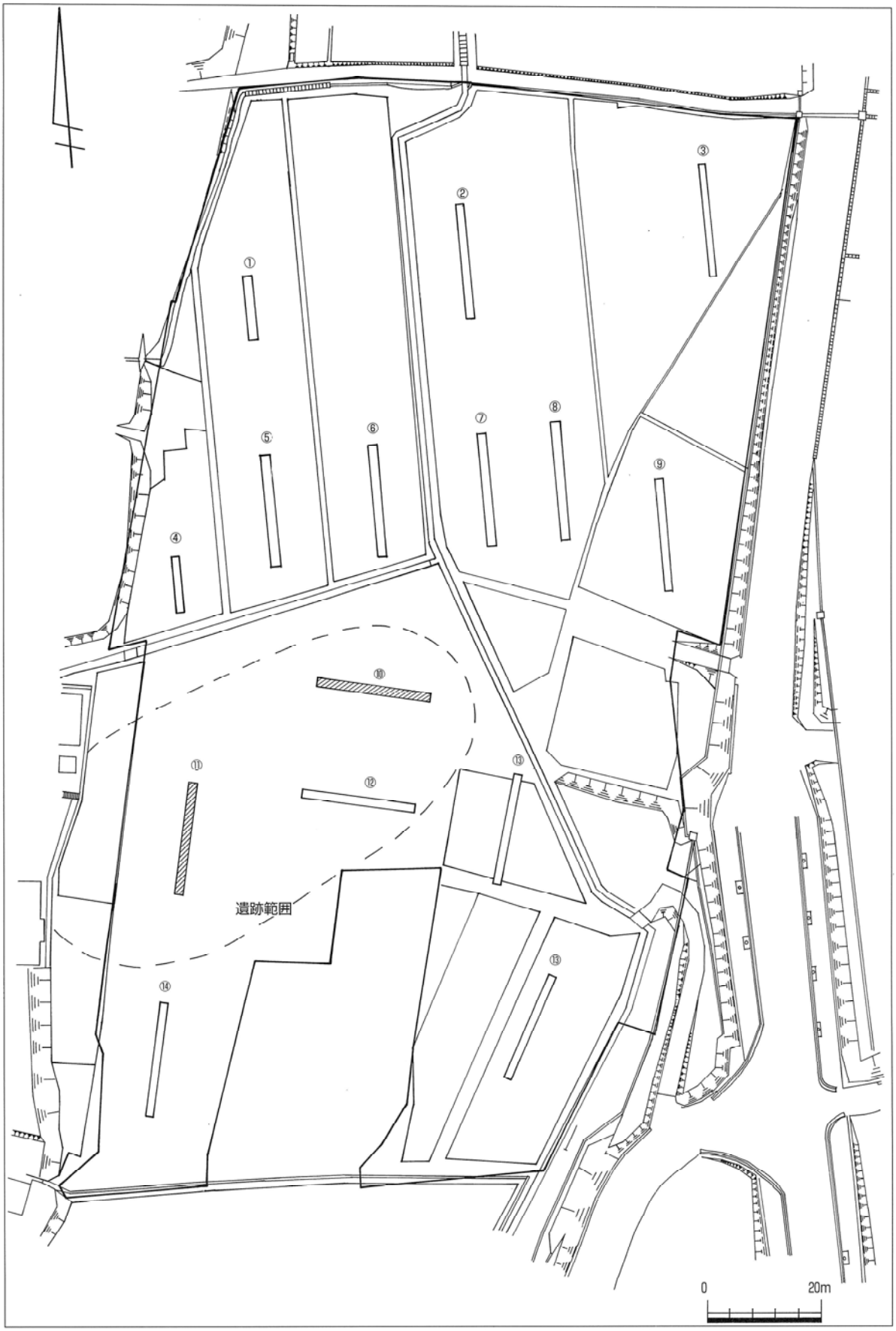
遺跡環境　長井市街地の北側、野川と最上川によって形成された河岸段丘上に位置する。遺跡の西側は比高差約４ｍの高台が広がり、上位段丘が形成されている。周辺は道路や橋が整備され成田工業団地として急激に開発がおよんでいるが平成元年の分布調査では方形の塚が確認された。現状は墓碑が建っており一辺が約５ｍの方形を呈し高さが0.5～１ｍにおよぶ。基盤整備が行われる以前は複数の塚が存在したという。

調査状況　開発予定区域に長さ10～20ｍ、幅１ｍのトレンチを任意に15箇所設定し、地山層まで重機を用いて掘り下げを行い遺構・遺物の検出にあたった。

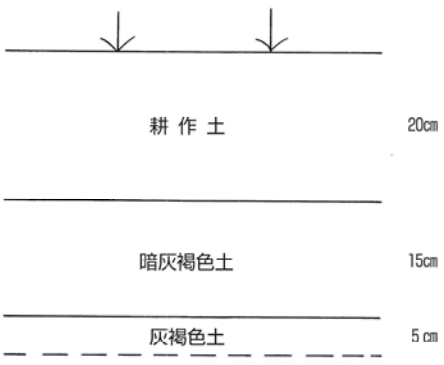
調査結果　当該開発予定地はこれまで未踏査区域であり、開発予定面積が広範囲におよぶため試掘調査を実施した。試掘調査の結果10・11トレンチから須恵器片が出土した。しかし、遺物が出土したトレンチ付近から３・７～９トレンチにかけて粘質土の地山層が安定した状態で検出されたものの、地山層までの土層堆積が浅いうえ耕作による削平が著しく、他のトレンチでは砂礫層が認められ遺構は検出されなかった。これらのことから開発予定区域の北東から南西方向にかけて、遺跡の南側を流れる野川によって形成された自然堤防が存在し遺跡が営まれたが基盤整備や耕作等で撹乱を受けたものと推測される。

したがって本造成工事が遺跡におよぼす影響はきわめて少ないものと考えられる。

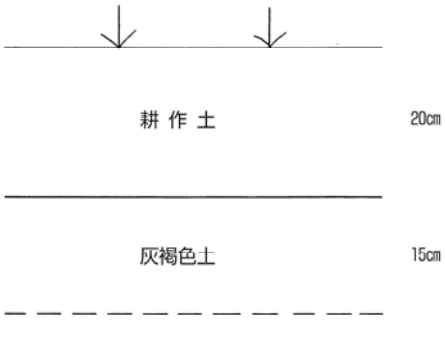
図版３　塔ノ下遺跡遠景



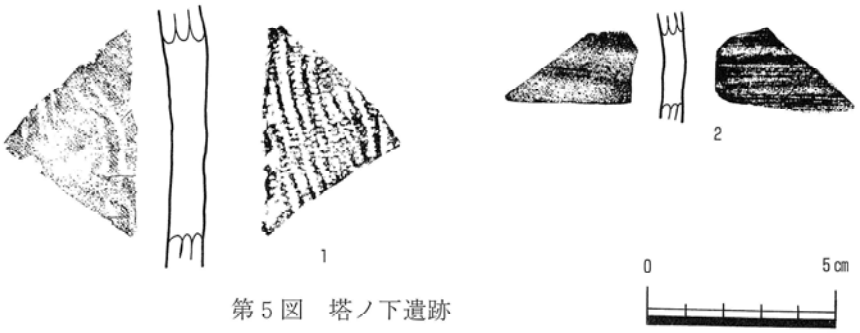
第4図　塔ノ下遺跡概要図



10トレンチ 土層断面



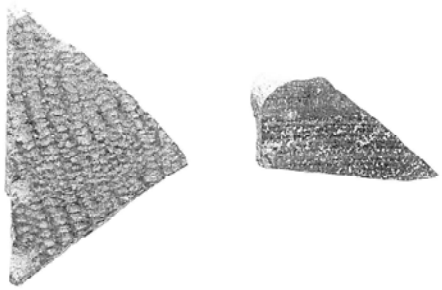
11トレンチ 土層断面



第5図　塔ノ下遺跡

10　トレンチ

11　トレンチ



出土遺物

図版4　塔ノ下遺跡

4．本宿東（もとじゆくひがし）遺跡

所 在 地　長井市成田地内

調査期間　平成16年１月７日

起因事業　個人宅地造成

遺跡環境　長井市街地の北方に位置し、平成元年分布調査で発見された近世の遺跡である。最上川によって形成された河岸段丘上に位置し、江戸後期から最上川舟運の発達とともに賑わいを見せる成田街道沿いにある。本遺跡から南西約60ｍには縄文時代前期初頭の三島遺跡がある。

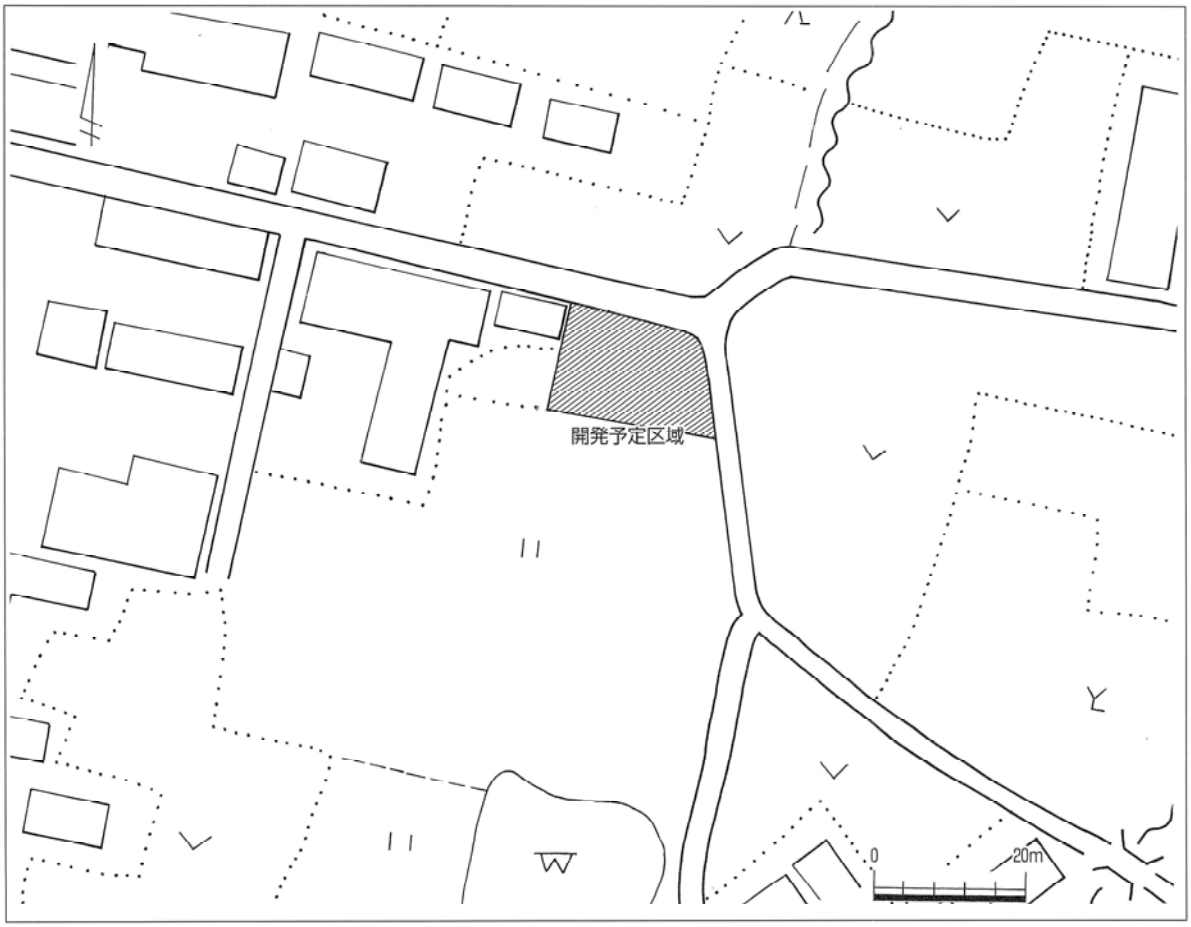
調査状況　開発予定区域に１×６ｍのトレンチを任意に２箇所設定し、地山層まで重機を用いて掘り下げを行い遺構・遺物の検出にあたった。

調査結果　地山層まで約70㎝の深さであったが耕作や農作業に伴う撹乱が多く見られ、遺構・遺物は検出されなかった。

本造成工事が遺跡におよぼす影響はきわめて少ないものと考えられる。

調査区近景（上）　１トレンチ（下）

図版５　本宿東遺跡



第６図　本宿東遺跡概要図

Ⅲ　遺跡台帳整備に係る調査

5．問答山（もんどやま）遺跡

所 在 地　長井市勧進代地内

調査期間　平成15年５月20日～６月12日

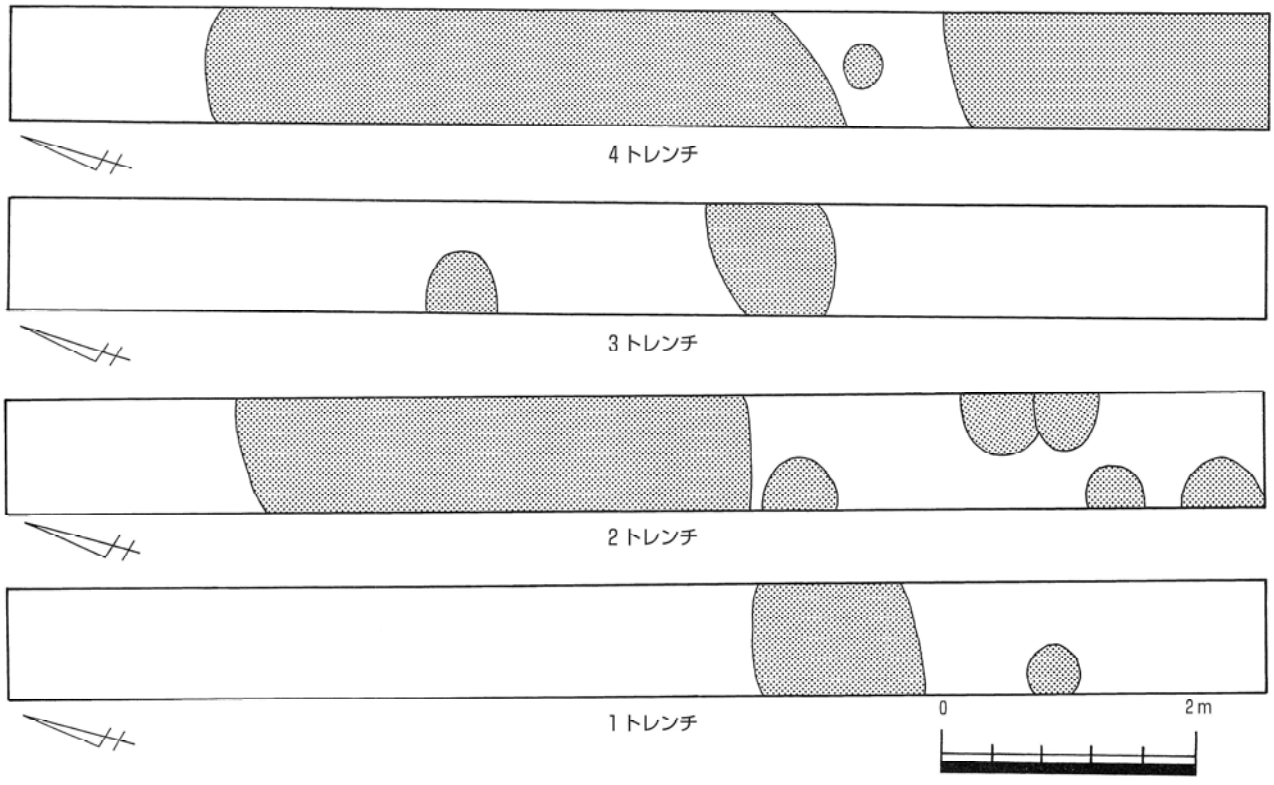
起因事業　遺跡台帳整備

遺跡環境　長井市街地の北西部、朝日山系の裾野に位置し、平成13年に実施した試掘調査で確認された遺跡である。山ろく一帯には数多くの遺跡が点在し西南約２㎞の地点には縄文中期の集落で半截木柱遺構が検出された長者屋敷遺跡がある。遺跡の西には勧進代と草岡両地区の境の目安になった問答山があり、遺跡の所在する高橋さん宅の屋号が問答山とよばれていることから問答山遺跡とした。

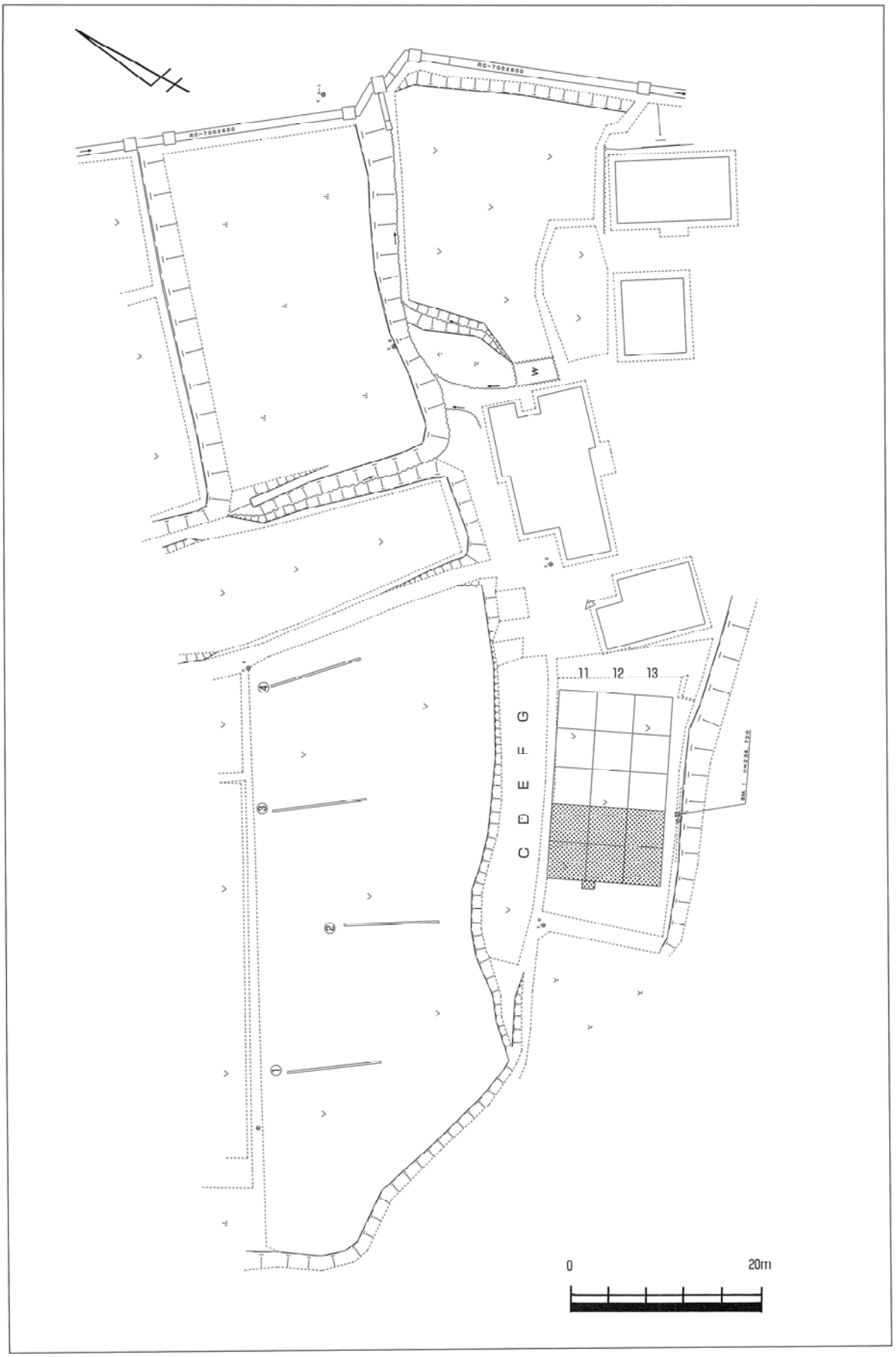
調査状況　平成13年の試掘調査で炭化物を多量に伴って遺物が出土した地点を中心に、４×４ｍのグリットを設定し８×12ｍの範囲を精査した。包含層に達する深さが約30㎝と浅いため、人力で掘り下げを行い遺構・遺物の検出にあたった。また、遺跡の範囲を調べる目的から精査区域の西側一帯に１×10ｍのトレンチを任意に４箇所設定し、重機を用いて掘り下げを行った。

調査結果　精査区域から縄文時代中期の住居跡２棟と廃棄された複式炉１基を検出したほか、整理箱で６箱の遺物が出土した。住居跡は重複した状態で検出され、新しい住居跡を１号、古い住居を２号とした。２号住居跡には複式炉を伴い、２個の埋設土器が検出された。詳細は事項で述べることとする。

４箇所の試掘では２・３トレンチで遺構が検出されその形状から住居跡と推測される。また、柱穴や炉跡の石組みの一部も検出されたため遺跡の範囲はさらに西側に広がるものと考えられる。



第７図　問答山遺跡トレンチ概要図



第８図　問答山遺跡概要図

i　基本層序

問答山遺跡は山ろくに位置し、西から東に張り出した緩やかな傾斜地に台地に営まれているが、小河川や耕作等により調査区とその西側では段差が生じ段丘状の地形を呈する。このたびの調査ではD－11区の西壁の層序を記述することとする。

第Ⅰ層　表土層　砂混じりの黒色土。

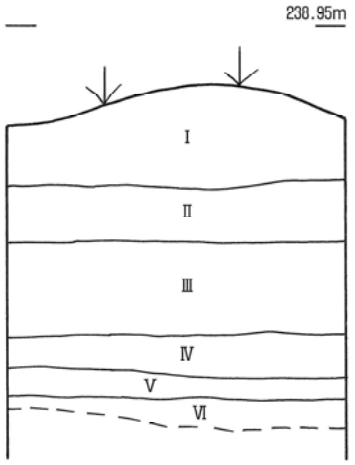
第Ⅱ層　暗茶褐色土層　褐色、橙色粒子を若干含み粘質でしまりある土質。本層の中位から下位にかけて遺構プランを検出。

第Ⅲ層　灰褐色土層１㎜大の砂粒を多く含み褐色土とⅡ層がブロック状に混じりしまりありかたい土質。

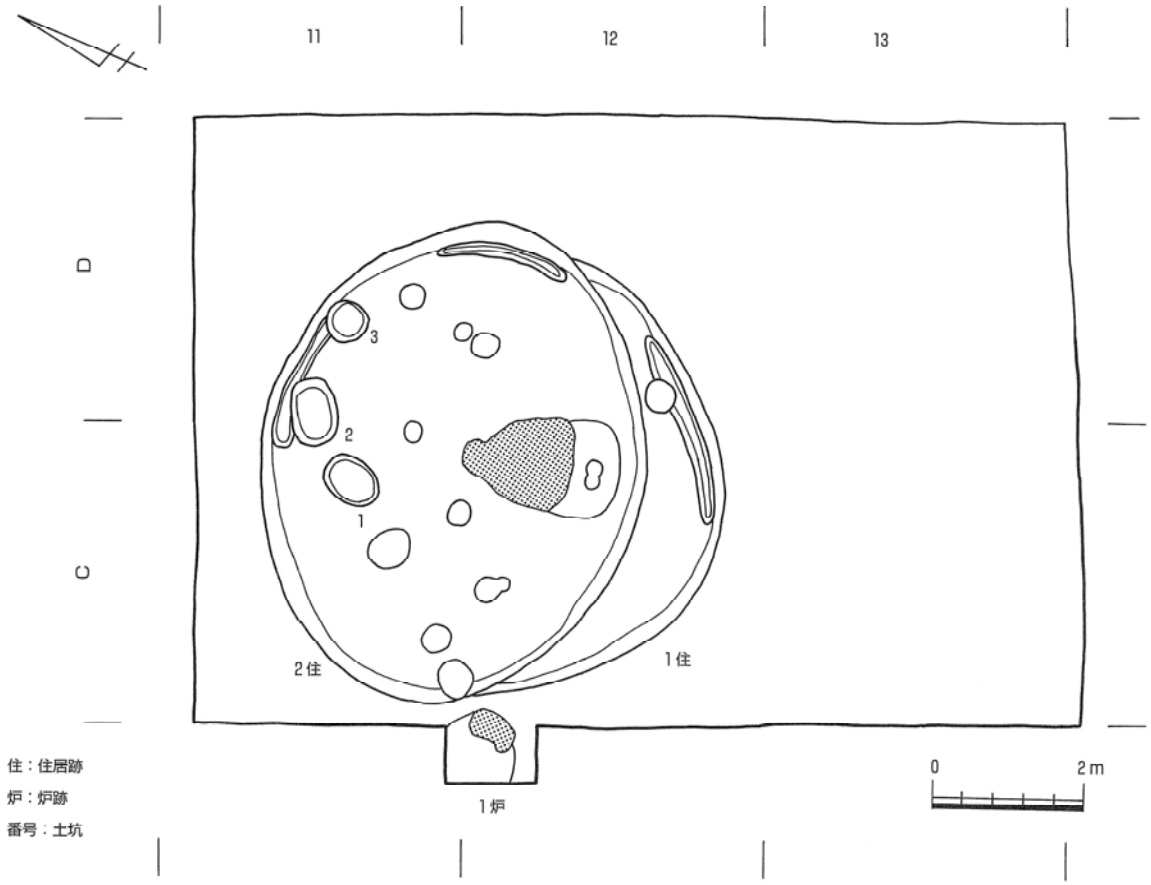
第Ⅳ層　暗茶褐色土　褐色土と暗褐色土がブロック状に混じり粘質でしまりある土質。

第Ⅴ層　明茶褐色土　Ⅲ層に近い土質であるが砂粒の割合が少ない。

第Ⅵ層　茶褐色土　褐色粒子を若干含み粘質でしまりある土質。



第９図　土層図（Ｓ＝1/20）



第10図　問答山遺跡遺構配置図

ⅱ　検出された遺構と出土遺物

（1）竪穴住居跡

1号住居跡（第11図、図版7）

形　　態　平面形はほぼ円形を呈し、炭化物と土器片を多量に含む土質でプランを確認した。壁は全体的に緩やかな立ち上がりを呈し、北側で拳大の礫が密集して検出された。また、床面はほぼ平坦でかたくしまった土質で、炭化粒子の密集箇所が3箇所で確認された。

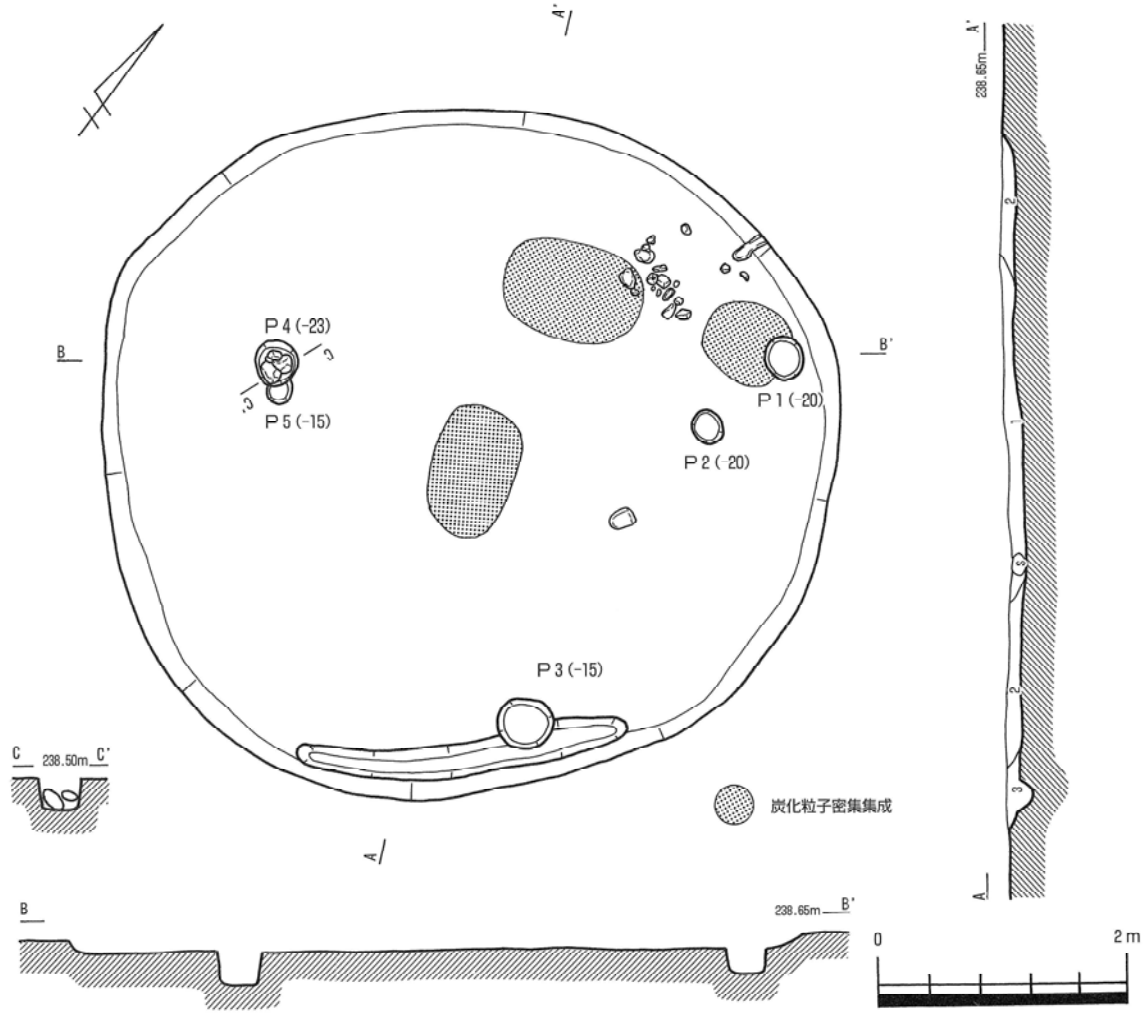
重　　複　2号住居跡と重複するが本住居跡が新しい。当初、1棟の住居跡と想定し掘り下げを行っていたが、かたくしまった土質を住居跡の床面と推定し土層セクションおよびサブトレンチの精査から2号住居跡と重複関係にあると判断した。

規　　模　径が5.4～5.9m。確認面からの深さは10～15cm。

柱　　穴　ピットは5基検出され、確認面からの深さは15～20cmを測る。P4の底部から拳大の礫3個が出土し、深さや配置からP1、P3、P4の主柱配置と推測される。

周　　溝　東南壁に沿って検出され長さ2.6m、幅16～32cm、深さ10cmを測る。

炉　　跡　検出されなかった。



第11図　1号住居跡

覆　　土　1は灰黒褐色土で指頭大の炭化物と褐色粒子を多く含み、しまりある土質である。多数の遺物が出土した。2は暗茶褐色土で褐色、橙色粒子を多量に含む。粘性を帯び、炭化物を多く含みしまりのある土質である。

時　　期　炉跡や埋設土器は検出されなかったが、住居跡中央部の覆土から出土した遺物がすべて大木10式を主体とする縄文中期末の土器であることから、本住居跡は当該時期の所産と考えられる。

出土遺物

土　　器（第12～15図、図版10～13）

本住居跡からは整理箱で約3箱の量が出土し、すべてが縄文時代中期末の土器である。主体を占めるのが大木10式土器で、わずかに大木9式土器が混在し、両者に伴う粗製土器の出土もある。一部復元された土器もあるが小破片が大多数を占めるため、ここでは文様の特徴から分類を行うものとする。

大木9式土器（第14図16～26、図版10）

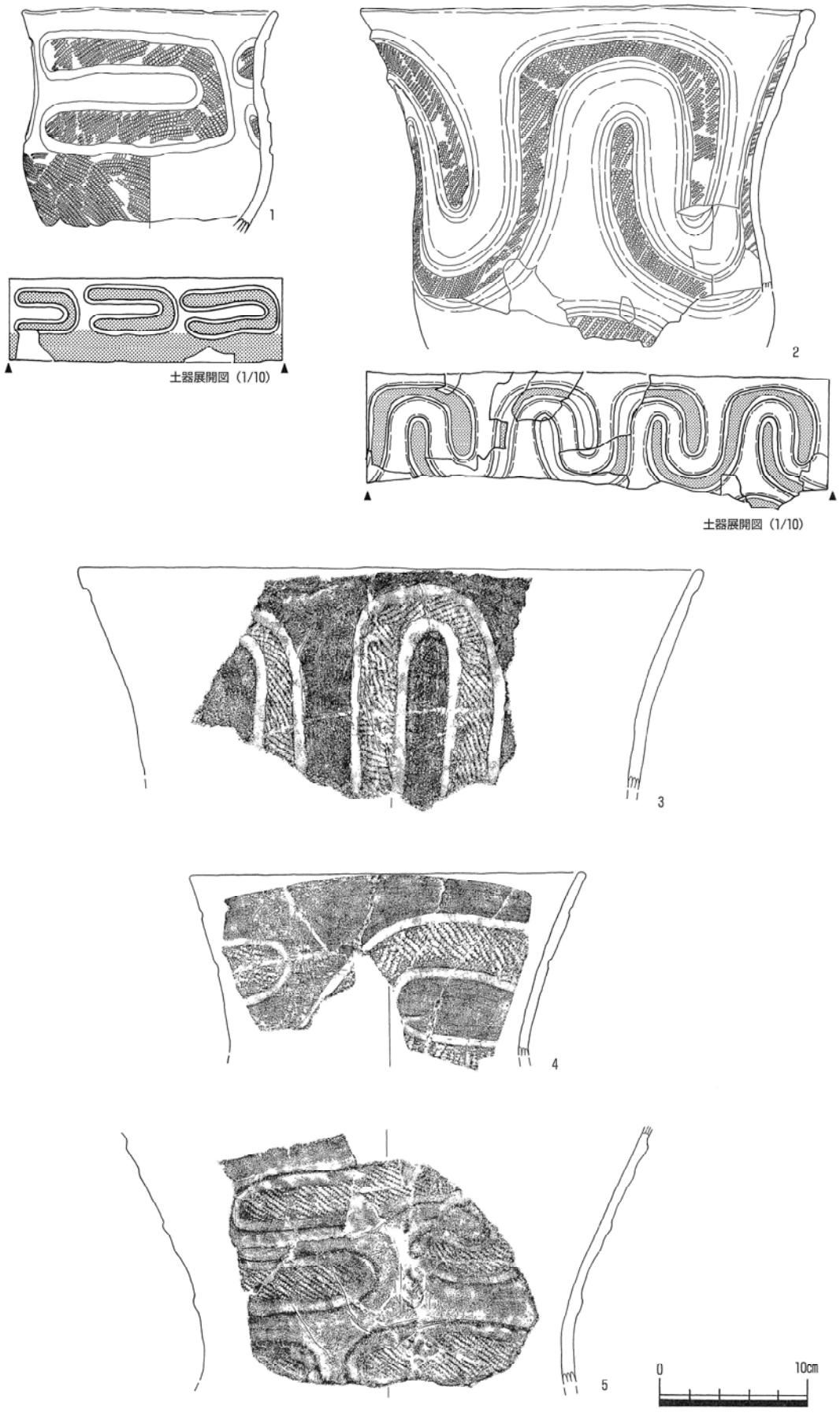
16～22は隆帯や沈線による曲線や渦巻き文が施された土器である。16は内湾した口縁の土器で口端が外反し、隆帯や沈線による曲線や渦巻き文が施される。17は内湾した口縁に隆帯による曲線文が施される。18～22は体部破片で隆帯や沈線による曲線や渦巻き文が施される土器である。また、22の表面には隆帯に沿って朱塗りの痕跡をとどめる箇所がある。

23～26は沈線による磨消縄文で区画された文様が縦長に施された土器である。23・24は3～4条の沈線で文様を区画し、25・26は沈線で区画された縦長の文様が垂下する胴部破片である。いずれも薄手のつくりである。

大木10式土器（第12図1～5、第13図6・7、第14図27～51、第15図52～71、図版10～13）

1・3・4・6・7・27～47は縄文施文部を沈線による曲線で区画し文様を描き出している。1は反りぎみの口縁をもち胴部が膨らんだ器形を呈する深鉢である。底部付近を欠損するが胴部から口縁にかけて縄文施文部を沈線で区画した3単位の横位U字状文が巡り胴下半は縄文が施されるが、当該時期に特有の口縁部文様帯と胴部の地文を区画する波状沈線は見られない。3は口縁が外反し胴部が膨らみ底部にかけてすぼまる器形の深鉢と推測される。口縁から体部にかけて沈線で区画された縦長の文様が施され、厚手の器壁をもつ土器である。4は胴部が膨らみ口縁が外反ぎみに開く深鉢と推測され、口縁には沈線による横長の区画文が施される。6は4単位の小波状口縁をもつ小型の鉢である。口縁部文様は器を一周する1条の沈線で区画され、波状部に縄文を充填した沈線による楕円文が、口縁に沿って弧状の沈線が施される。楕円文および胴下半に施文される斜縄文は0段多条の原体が用いられている。7は体部下半から底部にかけての土器で、文様帯と地文部を区画する横位の沈線が巡る。文様部を欠損するがＲＬの縄文が斜位・縦位に施文されている。27～47は縄文施文部を沈線で区画し文様を描き出した土器である。30・31は口縁が内湾し小波状口縁を呈する土器で、46は刺突文が横位に施され、47は2条の平行沈線で文様を描出し、ＲＬＲの複節縄文が施文されている。

2・5・48～59は縄文施文部を沈線と微隆起線による曲線で区画し文様を描き出している。2は胴部が膨らみ口縁が外反ぎみに開く器形で、口縁から胴部にかけて横位のＳ字状文が連結した状態で巡らされＲＬの縄文が施文されている。胴下半部にも曲線文が見られるが、欠損しているため詳細は不明である。内外面と



第12図　１号住居跡出土土器（１）

も丁寧に調整が施され器壁の薄い土器である。５は胴部が膨らみ口縁にかけて外反ぎみに開く器形で、沈線と微隆起線による区画文が横位に施される土器である。48～59は沈線と微隆起線による曲線で区画し文様を描き出している。48・49・51は口縁が内湾し小波状を呈する小型の鉢で、52～53は口縁が内湾する鉢または深鉢と推測される。

60～71は縄文施文部を沈線と隆帯による曲線で区画し文様を描き出している。60は口縁が内湾し小波状を呈する土器である。62～70は同一固体の土器で、口端から口縁にかけて幅広の隆帯と沈線による横長の区画文が施される土器で、胴部にも同様の文様が見られる。器壁が1.2～1.5㎜と厚手の土器で縄文原体も太く粗いものが用いられている。71は口縁が内湾し小波状を呈する鉢で、波頭部から無文帯の「し」字状文が垂下する。

粗製土器（第13図８～15・第15図72～74、図版10・13）

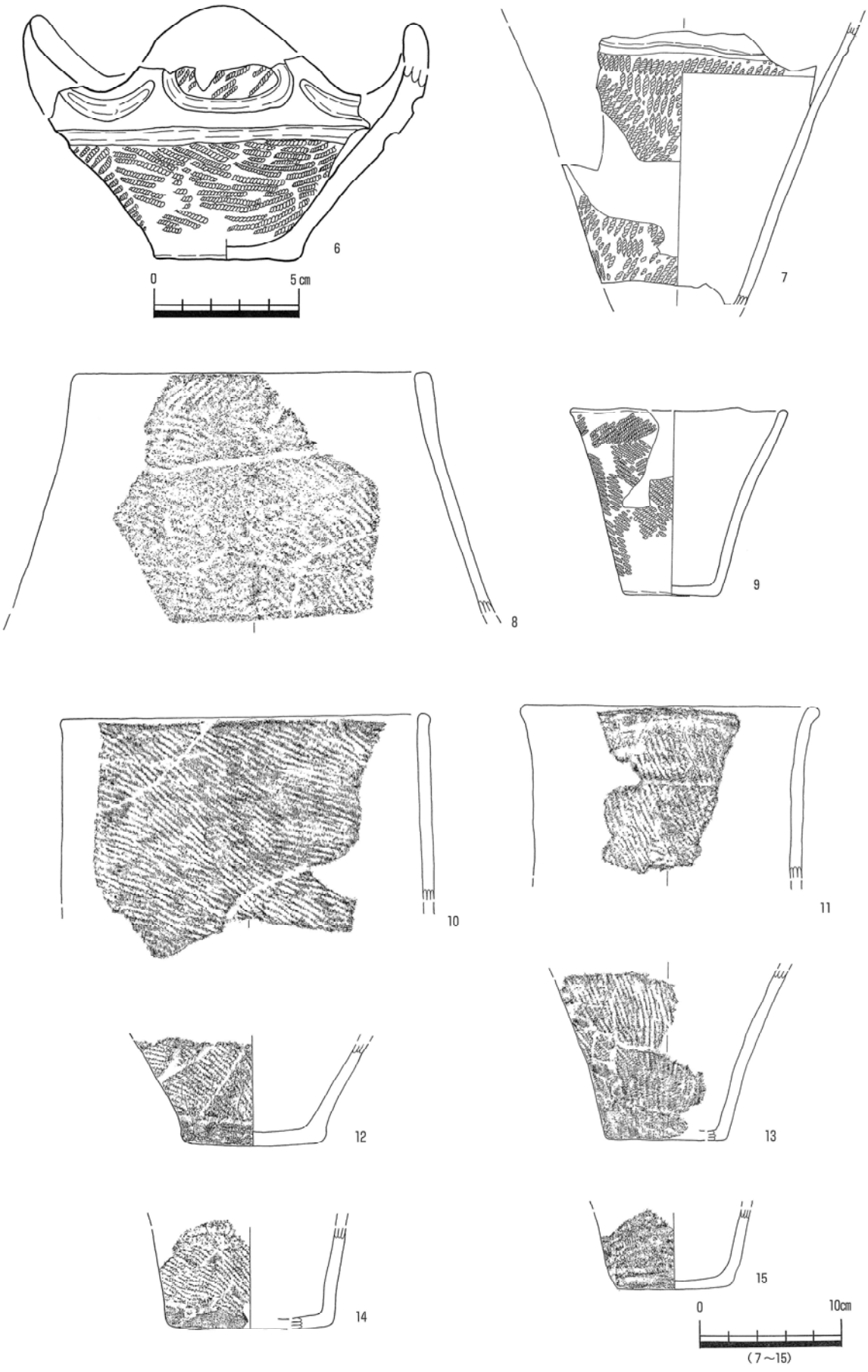
８～11、72～74は上記土器群に伴う粗製土器である。８は胴部から口縁にかけて「く」字状に内側に屈曲する深鉢で、やや肥厚した口縁は平縁を呈し、ＬＲの単節斜縄文が施文される。９は小型の鉢で口縁にかけて開きぎみに立ちあがる器形である。器全面にＬＲの斜縄文が施されるが口縁は横位に、胴部は斜位に、底部付近は縦位の方向にそれぞれ施文されている。10は胴部から口縁にかけてほぼ垂直ぎみに立ちあがりをもつ深鉢である。胎土には粒子の粗い砂粒を多く含み、ＬＲの斜縄文が縦位・斜位に施文されている。11は口端が外反ぎみに開き、胴部から口縁にかけてほぼ垂直ぎみに立ちあがりをもつ深鉢で、口端下位からＲＬの斜縄文が斜位・縦位に施文される。72は膨らみをもつ胴部破片でＲＬの斜縄文が縦位・斜位に施文さ、内側は丁寧に調整が施された土器である。73は胴部破片であるが斜縄文を詳細に観察すると条が絡み合いながら深い押圧と浅い押圧が交互に現れ不規則な配列を呈する。このような圧痕は直前段反撚に見られることからＬＬＲの原体が斜位方向に施文されたものである。74は胴部破片で無節斜縄文が斜位方向に施文されたように見えるが、条のなかには間延びした節が存在するものも見られることから、原体は反撚りのＬＬが施文された可能性もある。

12～15は深鉢の底部である。12は器壁が開きぎみに立ちあがりＲＬの単節斜縄文が施文される。13は器壁が開きぎみに立ちあがり縦位の斜縄文が見られる。14はやや垂直ぎみに立ちあがりＬＲの単節斜縄文が施文され内側は丁寧に調整が施される土器で、底部付近には朱塗りの痕跡と思われる赤褐色の顔料の付着が認められる。これらの土器は上述した土器群と同時期のものである。

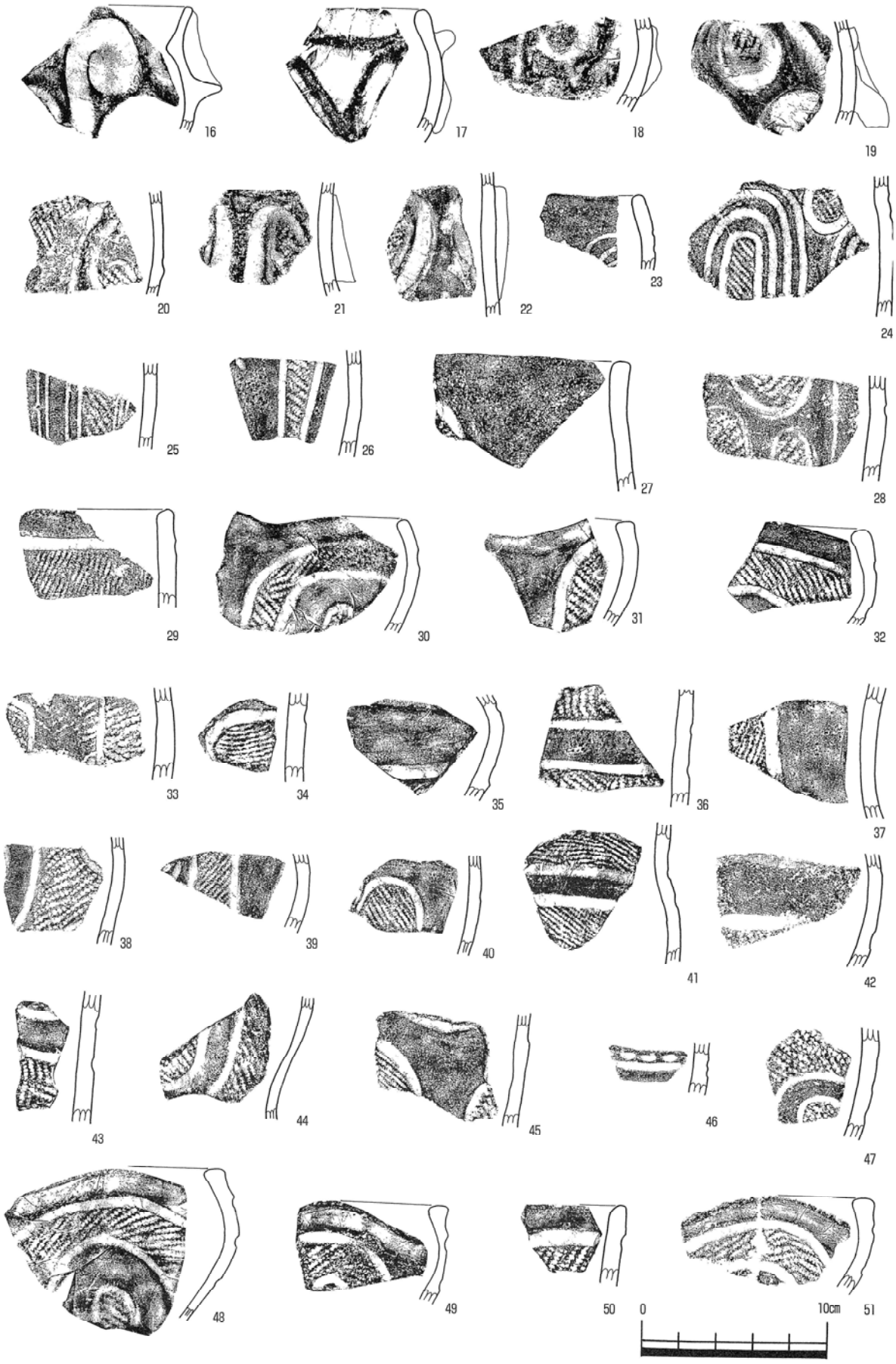
石　　器（第16図、図版14）

石鏃１点、石槍1点、削器１点、掻器２、凹石３点、磨石１点が出土した。

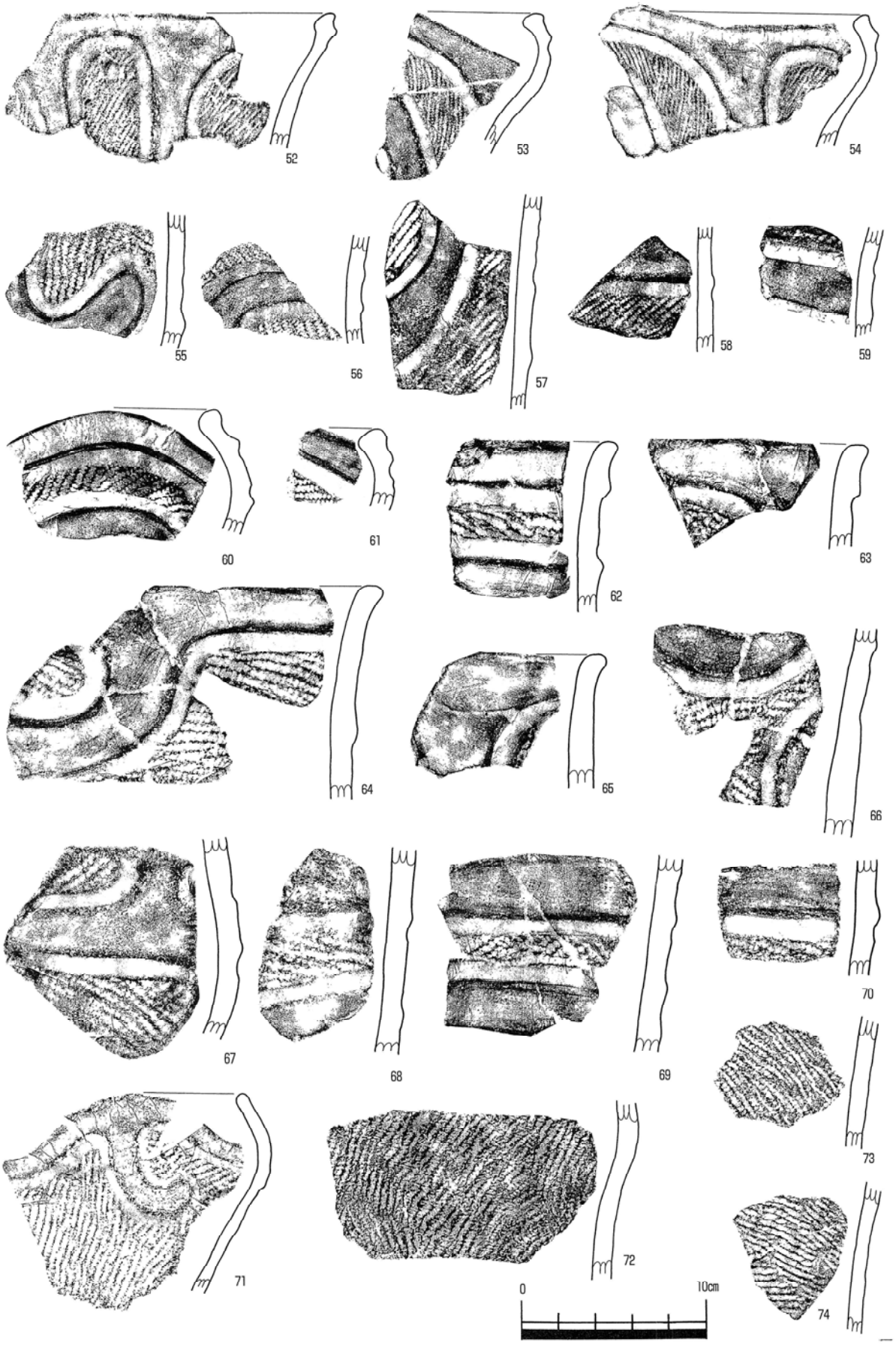
１は三角形を呈する石鏃で左右両辺と底辺に剥離が施され、両面に素材剥片の剥離面を大きく残した石器である。長さ2.8㎝、石質は頁岩である。２は小型の石槍で両辺から器中央に向けて細かい剥離が加えられ、断面が菱形状を呈する。長さ3.0㎝、石質は頁岩である。３は削器で断面が三角形を呈し先端部を欠損する。縦長剥片の両側辺に主要剥離面から背面に向けて剥離が加えられ刃部を作出している。長さ3.2㎝、石質は頁岩である。４・５は掻器である。４は基部を欠損するが、厚手の剥片の先端部に主要剥離面から背面に向けて剥離が加えられ刃部を作出している。主要剥離面にも剥離が見られるが小さく薄い剥離痕である。現存値3.2㎝、石質は頁岩である。５は縦長剥片の先端部に剥離を加え刃部を作出している。湾曲した剥片を素材としているところに当該時期の小型掻器の特徴がある。長さ3.4㎝、石質は頁岩である。６～８は凹石で



第13図　１号住居跡出土土器（２）



第14図　１号住居跡出土土器（３）

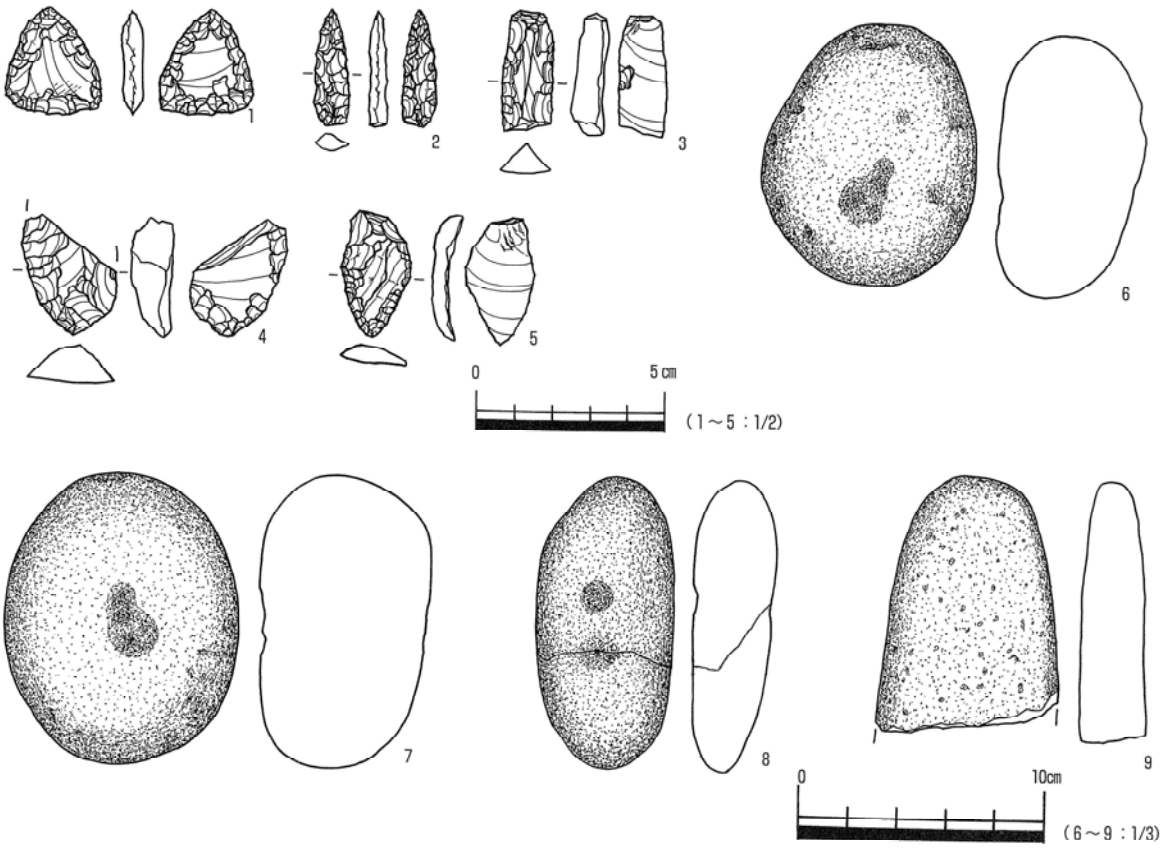


第15図　１号住居跡出土土器（４）

ある。6は扁平な礫面に複数の小さな凹部が一箇所につけられた石器である。長さ10.4㎝、石質は花崗岩である。7は楕円形を呈し、両面に複数の浅い凹部をもつ石器である。両面とも凹凸が見られず平坦面を呈することから磨石を転用した石器と考えられる。長さ11.6㎝、石質は花崗岩である。8は楕円形を呈し、平坦な両面に複数の浅い凹部をもつ石器である。接合資料で両者は離れた場所から出土している。長さは11.5㎝、石質は細礫岩である。9は端部を欠損するが、ほぼ楕円形を呈する磨石である。扁平礫の両面は磨痕が認められ平坦面を呈する。現存値10.5㎝、石質は石英安山岩である。

一括出土の剥片について（第17・18図、図版14）

近年、本県内陸部にみる縄文時代の橋上遺跡（石井1984）や、柴橋遺跡（石井1989）において縦長剥片と石核が出土し、それらの形状や製作技法を比較すると旧石器時代の石刃技法による石器群と近似する資料として注目されている。剥片は縦長で両側辺と並行する稜線が走り石核は円錐形を呈し、剥片と石核の接合資料も確認され縦長剥片の連続的剥離工程が復元されている（石井1996）。同様の石器群を全国的規模でとらえ北海道や九州北部の発見例を挙げ、本県の石器群が縄文中期に限って見られることから自生の可能性を示唆している（阿部1986）。また、石器流通の視点から、東北南部の遺跡に見る縦長剥片を素材とした石器を取り上げ、大きさの比較から石材原産地と供給地における石器の流通関係を探っており（会田2000）、縄文時代における連続的縦長剥片の作出技術が各地に存在することが明らかになってきた。



第16図　1号住居跡出土石器（1）

これらの観点から問答山遺跡出土の一括出土の剥片について大きさや形状、剥片に残る剥離痕の特徴から剥片剥離の工程を探ってみるが、石核が検出されていないため接合資料と剥片から相互の関係を述べてみる。

剥片は１号住居跡中央部の覆土下位から18点がまとまって出土し、そのなかで２件４点の剥片が接合した。これらは直径約20㎝の範囲から検出されたもので多量の土器片とともに出土したことから一括廃棄されたものと推測される。剥片の計測値は表に記したが最も長いもので97.3㎜、短いもので43.6㎜を測り、５～７㎝の範囲に14点を数える。幅は最大で46.8㎜最小で20.3㎜を測り、２～４㎝の範囲に14点を数える（第18図）。仮に縦長剥片を長さが幅の２倍以上の値をもつ剥片と定義すると出土品の半数近くがこれに該当する。また、剥片の厚さも平均で約８㎜と薄手のつくりで横断面も三角形や台形状を呈する。小型ではあるが規格性が認められる。

接合資料を見るとＡ（第18図）は12・13が接合したもので、剥離面を打面とし石核から打ち剥がされたのは13→12の順である。背面における剥離面が腹面と同じ打撃方向を呈し、両側辺とほぼ平行して走る複数の稜線が見られ、接合資料Ａが打ち剥がされる以前の剥片剥離の痕跡である。また、剥片先端部に斜方向からの剥離が加えられている。Ｂ（第18図）は20・21が接合したもので、打面は打撃における衝撃で形状をとどめないが両者とも階段状を呈する。湾曲した剥片の先端部で接合し両者の間に入る剥片は未検出であるが、接合資料の断面形態から打点の位置が推定される資料である。両側辺とほぼ並走する稜線の存在から本資料が打ち剥がされる以前の剥片剥離痕である。また、剥片先端部に節理面が残り前者同様に斜方向からの剥離が加えられている。

他の剥片にも接合資料と同様の特徴が見られる。すなわち剥片背面には両側辺とほぼ平行して走る複数の稜線が走り、背面剥離面のほとんどが腹面と同じ打撃方向をもち（11～22）、剥片先端部に節理面が残るものや（15～22・25）、長軸線に対し斜方向から剥離が加えられるものが多い（11～15・17・18・20・21・25～27）。

これらのことから、一括出土の剥片は柴橋遺跡や橋上遺跡等の接合資料で確認されたように「打面・作業面の作成→目的剥片の生産」という一定の剥片剥離技術のもとで石核から連続的に剥離されたものと考えられる。特に剥片先端部に見る斜方向からの剥離と節理面の存在は、剥片の長さ強いては石核の大きさを規定する要因のひとつと考えられ、用途を想定した規格品の作出か原石の大きさに由来するものであろう。また、打面における剥離数が単数、複数、打面の形状をとどめないものと様々であること、バルブの形態においても23・25では明瞭に認められるが、他は剥片の厚さと比較しても未発達なものが多いことから直接打法と間接打法の二種類の剥離手法が想定される。

以上、一括出土の剥片は縄文中期の「縦長剥片生産技術」として捉えることができよう。

参考文献

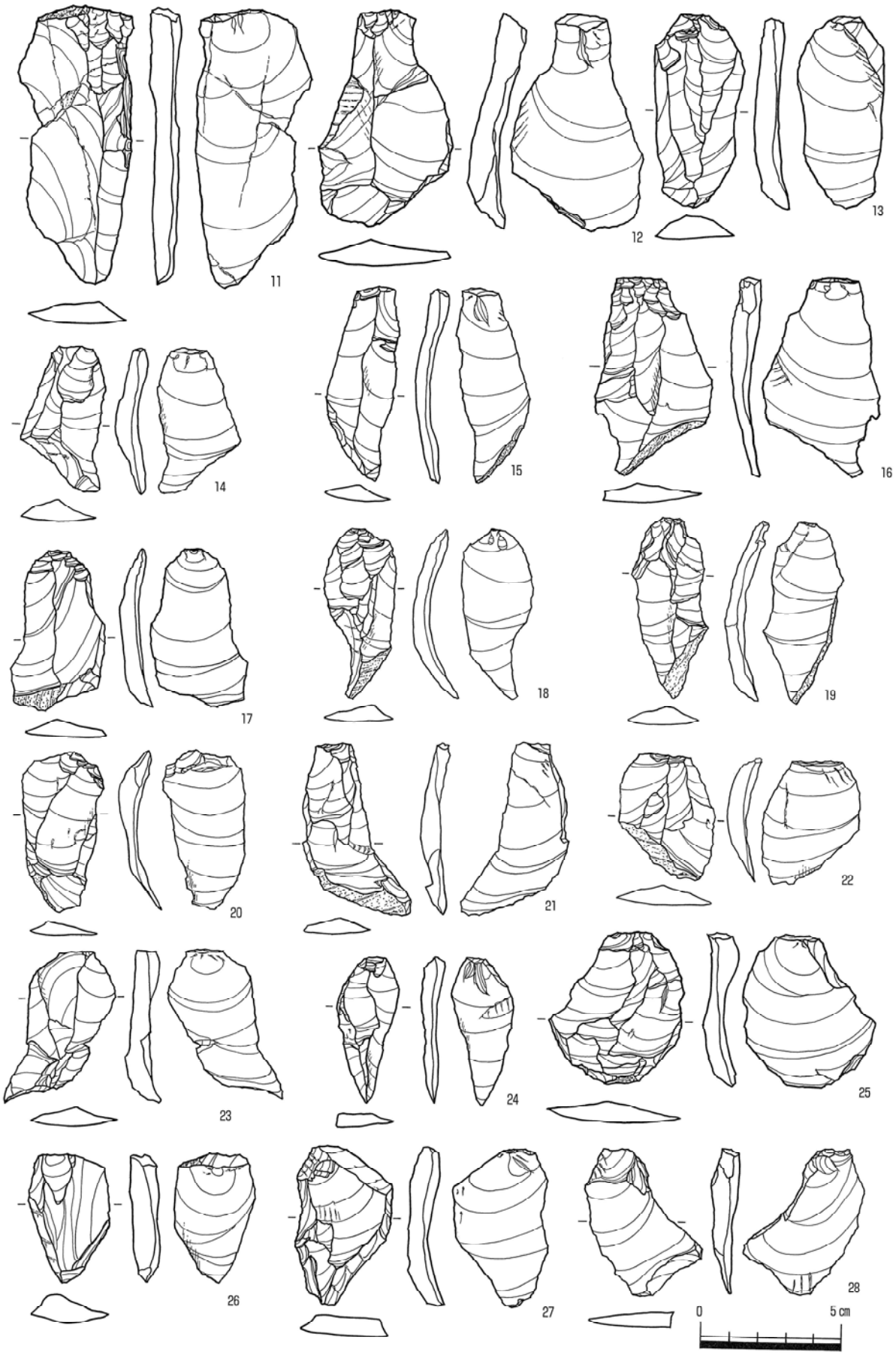
会田容弘　2000　「縄文時代の頁岩製石刃製作と流通―東北地方南部のありかた―」
『山形考古』第６巻第４号

阿部朝衛　1986　「縄文時代の縦長剥片生産技術」『法政史学』38号

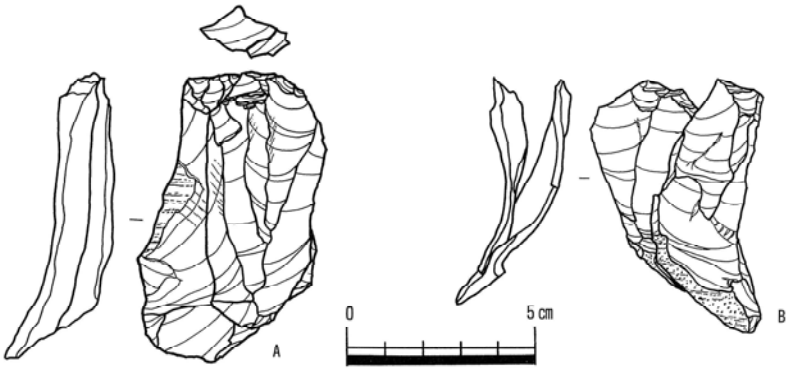
石井浩幸　1996　「寒河江市柴橋遺跡出土の石器接合資料」『西村山の歴史と文化Ⅲ』

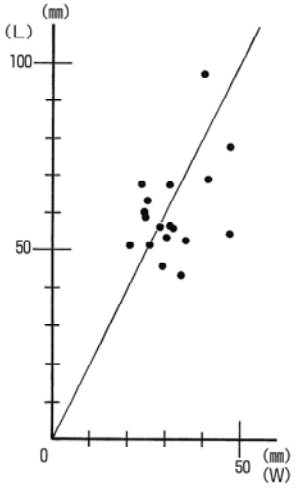
石井浩幸他　1984　『橋上遺跡発掘調査報告書』大江町埋蔵文化財発掘調査報告書第１集第１号　大江町教育委員会

〃　1989　『柴橋遺跡発掘調査報告書』寒河江市埋蔵文化財発掘調査報告書第７集第７号　寒河江市教育委員会



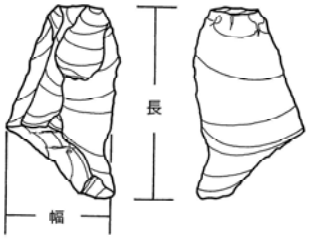
第17図　１号住居跡出土石器（２）





第18図　剥片の接合資料及び計測と長幅図

剥片の測定法
長さ：剥片剥離軸を基準とし、背面の基部から
　　先端部までの長さ
幅：剥片剥離軸と直交する最大幅
厚：最大厚



剥片計測表　　（単位：mm）

No	長さ	幅	厚さ	打面幅	打面厚	打面の剥離痕	石 質	備　　考
11	97.3	40.1	9.6	34.3	9.5	複	頁岩	基部に節理面
12	76.7	47.7	10.4	20.0	11.5	単	頁岩	13と接合
13	66.8	30.9	9.5	11.5	5.8	単	頁岩	12と接合
14	51.5	27.2	7.3	7.8	5.6	単	頁岩	
15	67.4	23.5	6.1	11.1	4.9	単	頁岩	先端部に節理面
16	69.3	41.2	8.6	35.4	5.4	複	頁岩	先端部に節理面
17	56.1	32.6	6.1	8.2	1.4	単	頁岩	先端部に節理面
18	59.3	24.8	6.4	5.1	0.9	単	頁岩	先端部に節理面
19	63.3	25.5	7.1	7.7	3.1	単	頁岩	先端部に節理面
20	56.7	28.6	7.7	—	—	—	頁岩	先端部に節理面･21と接合
21	60.5	24.3	5.8	—	—	—	頁岩	先端部に節理面･20と接合
22	43.6	34.1	7.4	—	—	—	頁岩	先端部に節理面
23	53.4	30.4	8.6	12.8	6.2	単	頁岩	
24	51.4	20.3	6.9	6.6	5.8	単	頁岩	
25	54.6	46.8	8.1	15.5	6.8	単	頁岩	先端部に節理面
26	45.5	29.1	9.2	25.2	7.7	単、節理面	頁岩	
27	56.2	32.7	8.6	12.5	3.9	複	頁岩	
28	52.3	35.2	9.9	17.0	5.9	複	頁岩	

２号住居跡（第19図、図版８）

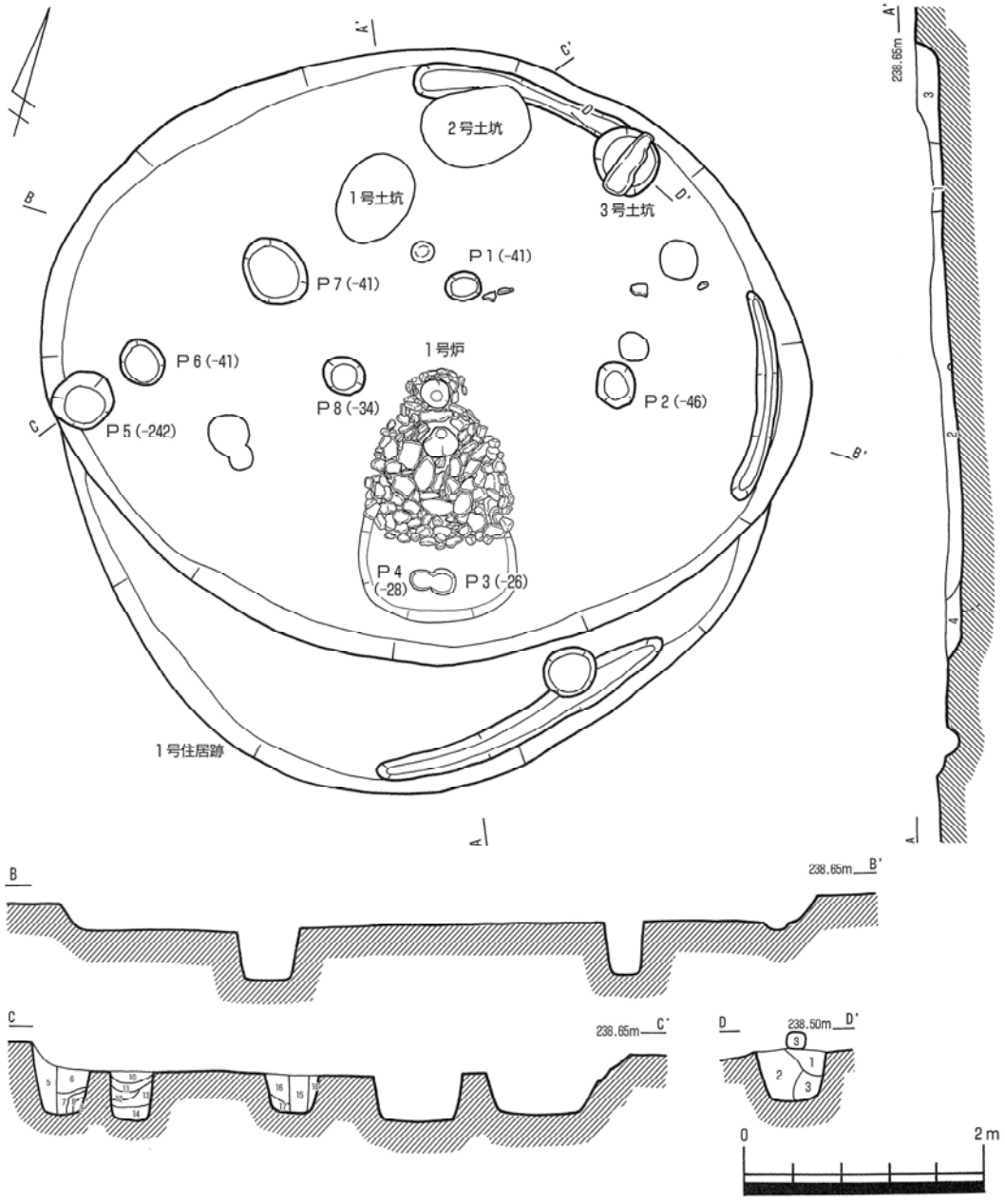
形　　態　平面形は楕円形を呈し、ほぼ東西方向に長軸をもつ。壁は全体的に緩やかな立ち上がりを呈し、床面は平坦でかたくしまった土質である。

重　　複　１号住居跡と１～３号土坑と重複するが、１号住居跡より古く３号土坑と同時期であるが、１・２号土坑との新旧関係は不明である。

規　　模　長径6.43ｍ、短径5.11ｍ。確認面からの深さは21㎝である。

柱　　穴　ピットは８基検出されたが明瞭な柱配置は不明である。確認面からの深さは26～46㎝を測る。

周　　溝　北壁沿いに長さ1.8ｍ、幅15～30㎝、深さ6㎝、東壁沿いに長さ1.75ｍ、幅12～20㎝、深さ10㎝の２基が検出された。

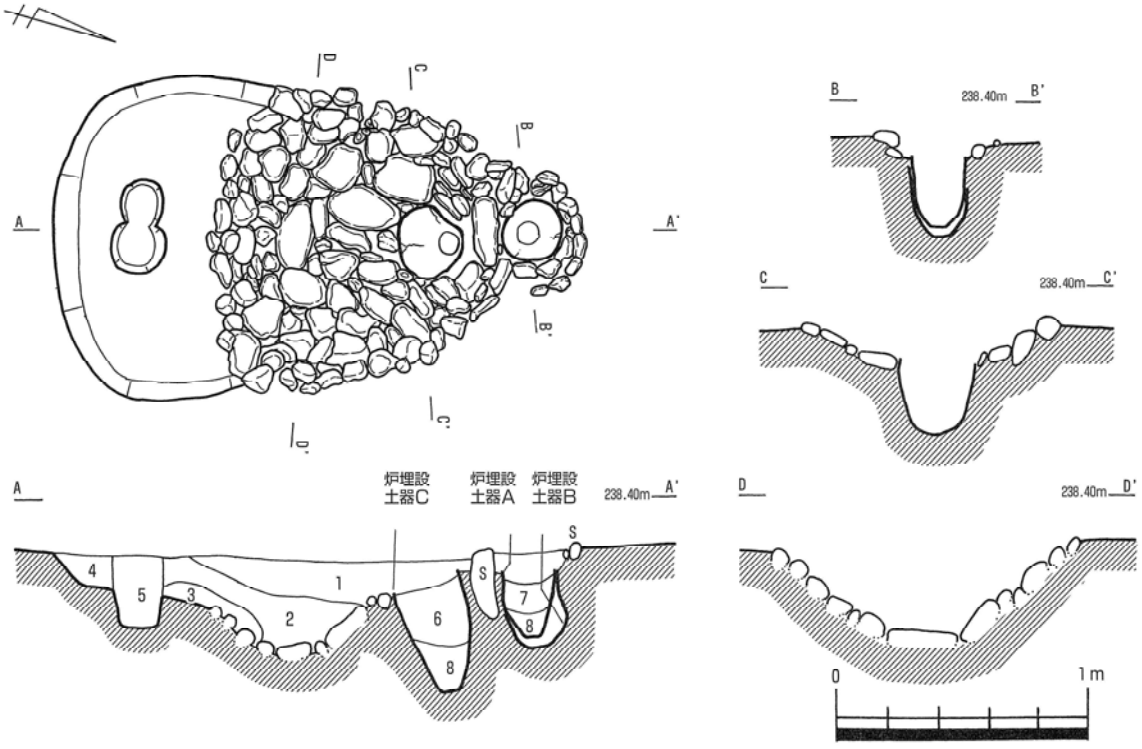


第19図　２号住居跡

覆　土　1は黒褐色土で粘性に富みしまりありかたい土質。2は茶褐色土で褐色・橙色粒子を多く含み、粘質でしまりありかたい土質。3は灰茶褐色土で褐色・橙色粒子を多く含み砂粒を若干含むかたい土質。4は茶褐色土で褐色・橙色粒子を多く含みしまりありかたい土質。1号住居跡からは多量の遺物が出土したが、本住居跡の覆土になると遺物の出土が極端に減少する。5は黒褐色土で粘性に富み褐色・橙色粒子を多く含む。6は暗灰褐色土で炭化物を若干含みしまり弱い土質。7は暗茶褐色土、8は茶褐色土、9は黒褐色土である。10は茶褐色土で褐色・橙色粒子を多く含み11は暗茶褐色土、12は茶褐色土、13は暗茶褐色土、14は暗褐色土である。15は灰茶褐色土、16は灰茶褐色土でしまりあり炭化物を含む。17は茶褐色土で粘質土。

炉　跡　（第20図、図版9）

土器埋設部、石組部、前庭部からなる複式炉である。主軸は2.1mで北北西を指し、最大幅は石組部で計測され1.21mを測る。土器埋設部は主軸と直行するかたちで設置された大型の扁平礫が炉埋設土器を仕切り、周囲を囲む礫は円形・楕円形を呈し拳大の規模であるが土中深く埋め込まれているため露呈面より2～3倍の大きさである。炉埋設土器は3固体検出された。炉埋設土器AとBは重なった状態で検出されAは内側、Bは外側に設置されている。また、ふたつの炉埋設土器は口縁部が切り取られた状態で埋設されているが、炉埋設土器Aの覆土から同土器の口縁部破片が検出されたほか、重なり合った炉埋設土器AとBの隙間から同土器Bの口縁部が一部出土している。炉埋設土器Cも口縁部が切り取られた状態で検出され、開口部が石組部側に傾いた斜位の状態で埋設されている。石組部の規模は上面において炉主軸方向約0.75m、直行幅約1.21mを測り底面部には板状の扁平礫を上面に拳大の礫を埋め込んでいる。横断面形は逆台形状を呈し、床面から底面部までの深さは約35cmである。前庭は掘り込みだけで礫は検出されず浅いピットが重複して検出された。炉跡の堆積土は次のとおりである。1は茶褐色土で炭化物、褐色粒子を多く含み、ややしまりのある土質。2は暗茶褐色土で1と同質であるが砂粒を若干含み、しまりが弱い土質。3は茶褐色土で粘性を帯



第20図　2号住居跡複式炉

びしまりある土質。4は茶褐色土で1と同質でしまりありかたい土質。5は暗褐色土で褐色・橙色粒子を多く含む。6は暗褐色土で小礫を若干含みしまりの弱い土質。7は暗褐色土で小礫を若干含みしまりの弱い土質。8は黒褐色土で炭化物を多量に含みしまりの弱い土質。

時　　期　大木10式

出土遺物

土　　器（第21・22図、図版15・16）

本住居跡から出土した遺物は炉埋設土器を除くと整理箱1箱にも満たない量である。縄文時代中期末の土器で大木10式土器に大木9式土器が少量混在し、両者に伴う粗製土器の出土がある。ここでは文様の特徴から分類を行うものとする。

大木9式土器（第22図6～10、図版16）

6は厚手の土器で、口端に沿って沈線が巡り横位の曲線文が施され、7は口縁が内湾し隆帯と沈線で曲線文が描かれている。8～10は縄文施文部を沈線による縦長の区画文が施された土器で、4は底部付近の破片である。

大木10式土器（第21図1～3・22図11～21、図版16）

2・3、11～13は縄文施文部を沈線による曲線で区画し文様を施している。2は炉埋設土器Bで、口縁上端を欠損するが胴部に膨らみをもち開きぎみに立ち上がる深鉢で、口縁から胴下半にかけて曲線文が施される。3は炉埋設土器Cで、口縁上端を欠損するが胴部に膨らみをもち口縁にかけてすぼまる深鉢である。胴上位には波状沈線が器形を一周し、口縁にかけて横位の曲線文が施される。11～13は沈線で区画した曲線文が施されている。

14～19は縄文施文部を沈線と微隆起による曲線で区画し文様を施す土器である。16・17は口縁が内湾し小波状口縁を呈する土器で曲線文が施される。

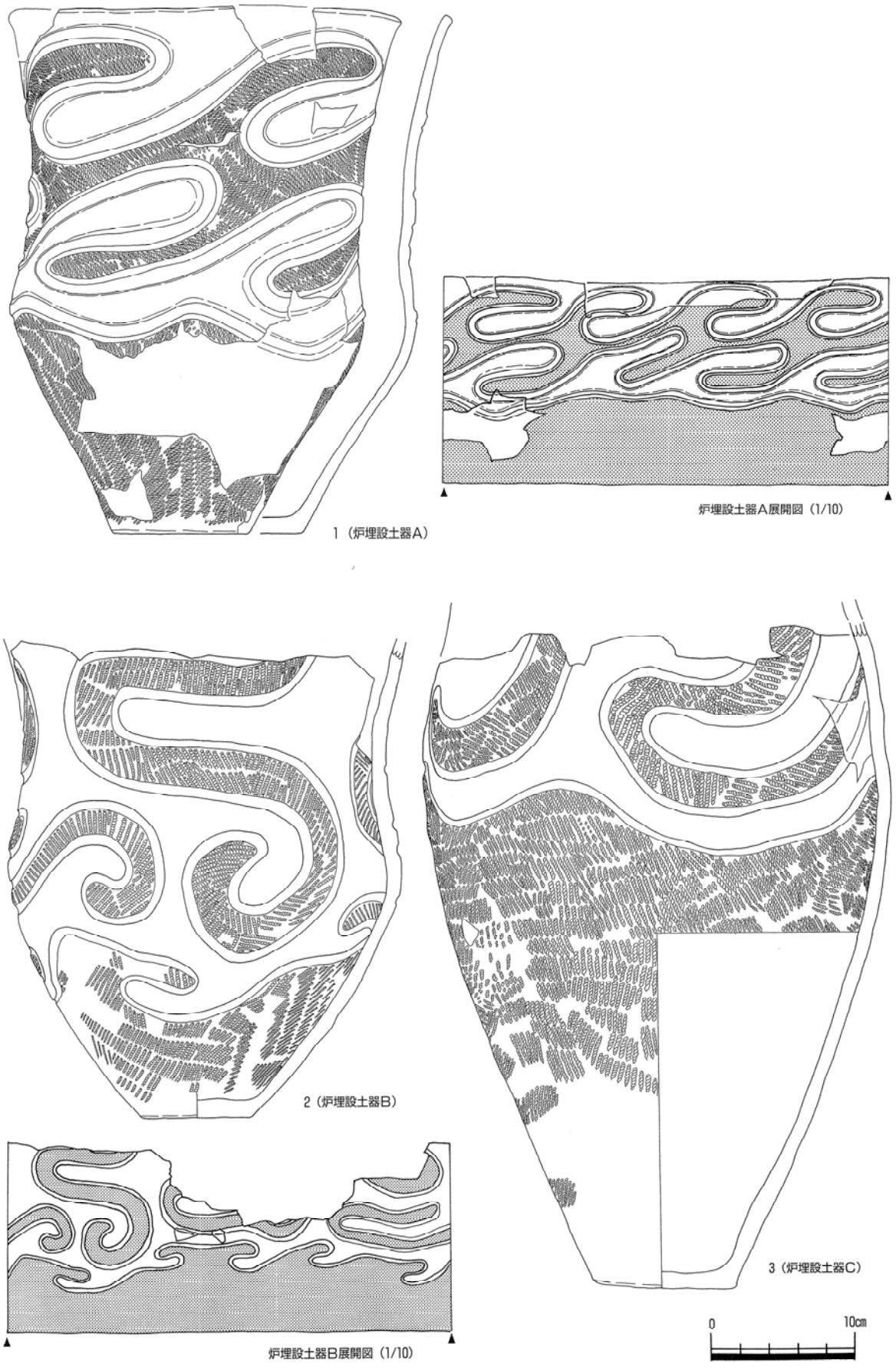
1・20・21は沈線と隆帯による曲線で区画し文様を施す土器である。1は炉埋設土器Aで、口縁が開きぎみに立ち上がり「く」字状に屈曲した胴部は緩い膨らみをもつ深鉢である。口縁から胴部にかけて沈線と隆帯による2段の波濤文が横位に施され、その直下に沈線と隆帯の波上文が胴部を一周する。器壁は薄手のつくりで内外面ともていねいな調整が施された土器である。21は区画文に沿って斜縄文と円形の刺突文が施されている。

4・5・22・23は上記に伴う粗製土器である。4は胴部が「く」字状に屈曲し口縁がすぼまる深鉢で直前段反撚LLRの縄文が施文され、内外面ともていねいな調整が施された土器である。22は小型土器の底部で底面に敷物の圧痕が残る。

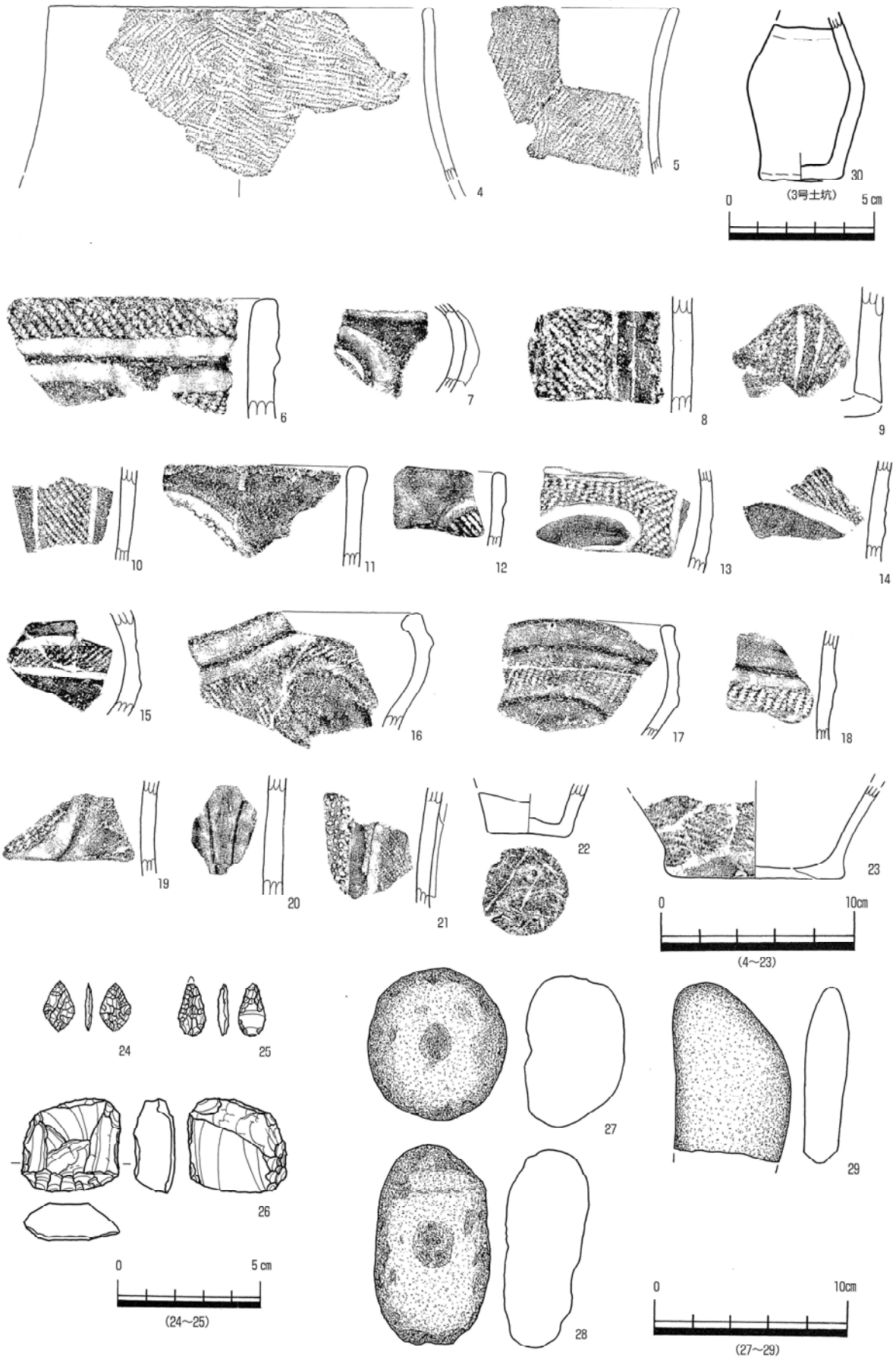
石　　器（第22図、図版16）

石鏃2点、掻器1点、凹石2点、磨石1点が出土した。

24・25は石鏃で、24は小型で薄手のつくりで両面に細かくていねいな加工である。長さ18㎜、石質は頁岩である。25も先端を欠損するが小型でていねいな加工が施されている。長さ19㎜、石質は頁岩である。26は掻器で厚手の剥片の一端に腹面から背面に向けて剥離を加え分厚い刃部を作出している。長さ32㎜、石質はチャートである。27・28は凹石で、27は円形を呈し、磨痕が認められる片方の面に凹部をもつ。長さ8.1㎝、石質は花崗岩である。28は楕円形を呈し、両面にそれぞれ単数の凹部をもつ石器である。長さ10.5㎝、石質は花崗岩である。29は磨石で端部を欠損するが、扁平で先端が尖った形状である。両面が平坦で線状痕が認められる。現存長8.9㎝、石質は石英安山岩である。



第21図　2号住居跡出土土器



第22図　2号住居跡出土土器・石器

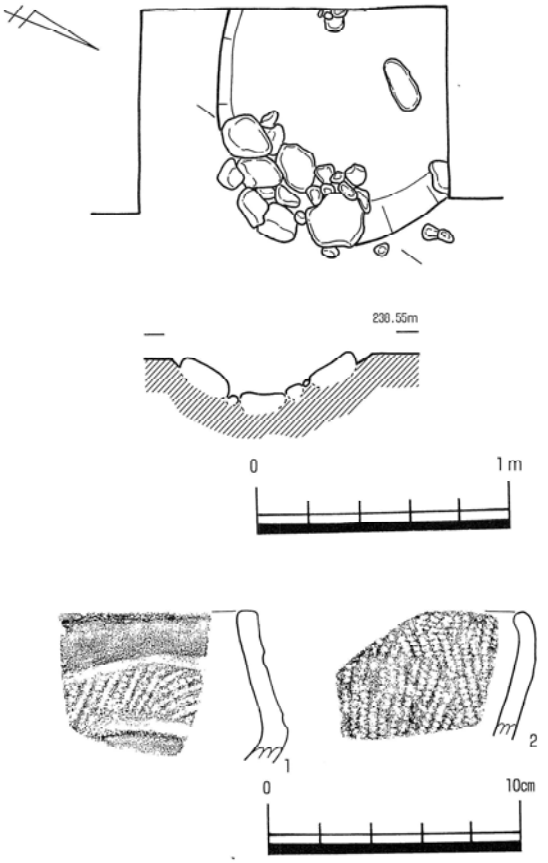
（2）炉　跡

1号炉跡（第23図、図版9）

B－11区の拡張区で検出された。1・2号住居跡の南西に隣接し石組みが部分的に残っているにすぎないが、断面形態から複式炉の石組部と推定される。石組の輪郭に沿って掘り込みが検出され、熱で風化した花崗岩礫が散在し、堆積土からは炭化物が多く検出され若干の遺物が出土しているが、炉に伴う埋設土器や掘り方等は確認できなかった。

出土遺物（第23図、図版16）

土器片15点、剥片1点が出土し、2点の土器を図示した。1は胴部が「く」字状に屈曲する土器で器形は不明である。内傾する口縁には縄文施文部を沈線で区画した曲線文が施される。2は口縁が内湾ぎみに立ち上がる深鉢であろうか。文様帯をもたず地文の斜縄文が施文される土器である。



第23図　1号炉跡

（3）土　坑

1号土坑（第24図）

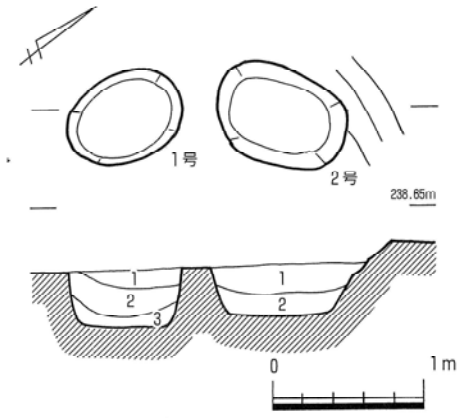
2号住居跡の床面で検出され、楕円形を呈し長径80cm、短径56cmを測る。数点の土器片が出土しているが文様は識別できない。覆土は1暗茶褐色土、2茶褐色土、3暗茶褐色砂質土。

2号土坑（第24図）

2号住居跡の床面で検出され、楕円形を呈し長径88cm、短径64cmを測る。数点の土器片が出土しているが文様は1号土坑同様、識別できない。

3号土坑（第19図、図版9）

2号住居跡の床面で検出され、長径58cm、短径52cmを測る。土坑上面に石柱が横たわった状態で検出され、長さ約60cmの角柱状の自然礫である。覆土から無文の小型土器1点が出土した（第22図30）。石柱、小型土器の検出から2号住居跡の祭祀に関わる施設と考えられる。覆土は1灰褐色土で砂粒、橙・褐色粒子を含む。2暗茶褐色土で粘質でしまりあり炭化物を若干含む。3茶褐色土でしまりあり炭化物を若干含む。



第24図　1・2号土坑

ⅲ　包含層出土遺物

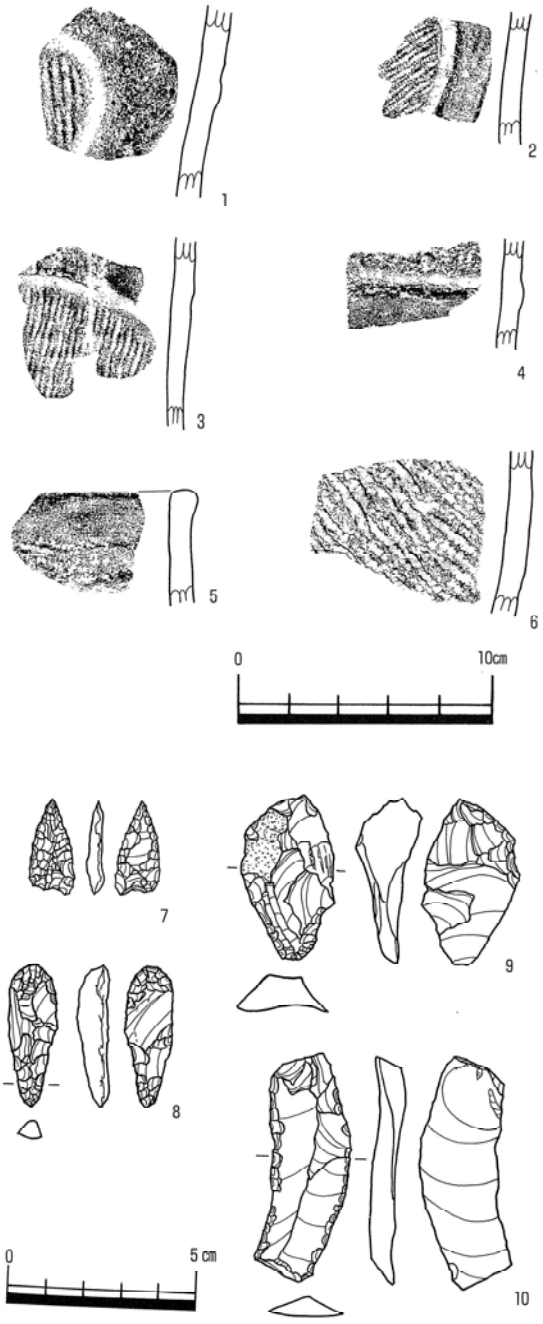
包含層から出土した遺物は少なく、整理箱１箱のも満たない量である。

土　　器（第25図１～６、図版16）

１は縄文施文部を沈線による曲線文で区画した土器である。２～４は縄文施文部を沈線と微隆起線による曲線文で区画した土器で、０段多条の斜縄文が施文されている。５・６は粗製土器で、５は口端直下に無文体を設け以下は斜縄文が施文される。６は条の並びが不規則で部分的に絡み合う箇所が見られることから直前段反撚ＬＬＲが施文された土器である。

石　　器（第25図７～10、図版16）

７は石鏃で基部に抉りをもち、一部素材の剥離面を残すが細かい剥離が施されている。長さ26㎜、石質は頁岩である。８は石錐で断面が三角形を呈する。素材剥片の剥離面を残すが基部まで剥離が加えられている。長さ38㎜、石質は頁岩である。９は刃部が尖る掻器で厚手の剥片を素材とし、刃部を除き粗い剥離が日立つ石器である。長さ44㎜、石質はチャート。10は削器で両側辺に剥離が見られる。屈曲しねじれた縦長剥片を素材としているが背面には両側辺と平行して走る稜線が認められ、１号住居跡から一括出土した剥片と同様の所産と見られる。縦長剥片生産技術で作出された剥片素材の石器として捉えられよう。長さ60.0㎜、石質は頁岩である。



第25図　包含層出土遺物

調査区近景（西から）

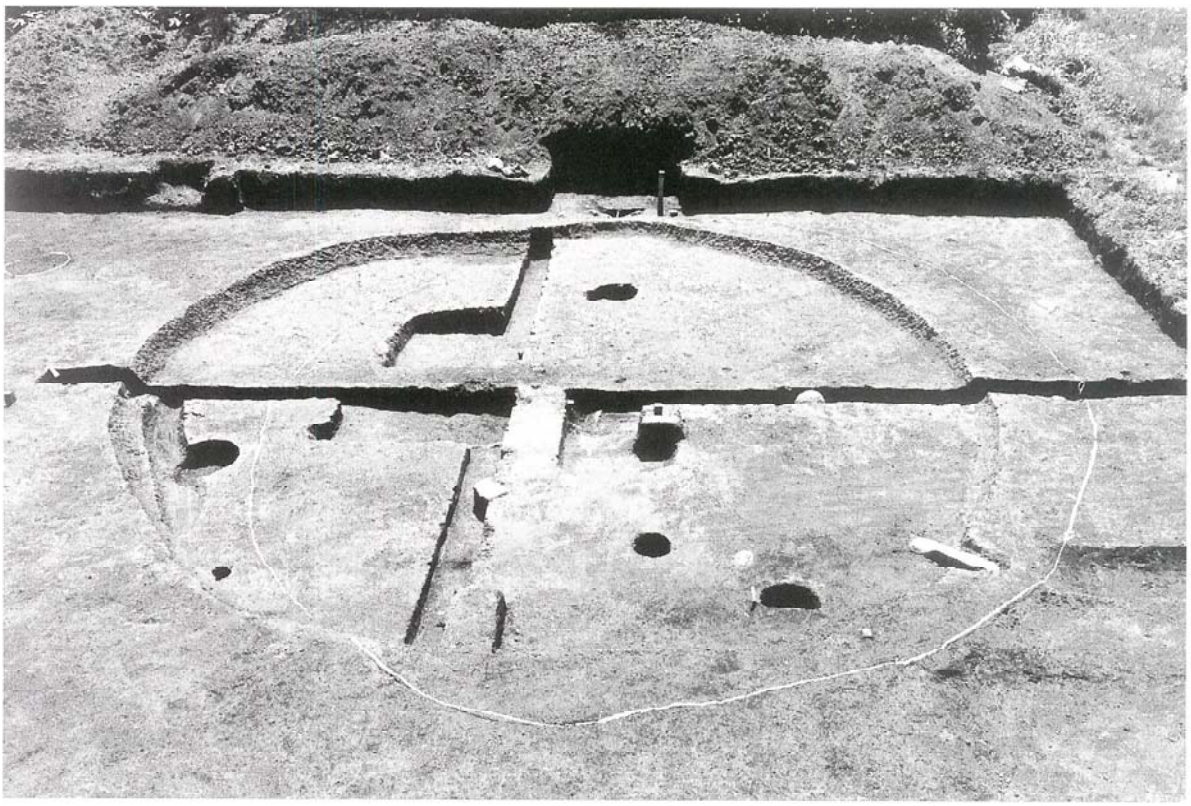
遺跡近景（東から）

2トレンチ

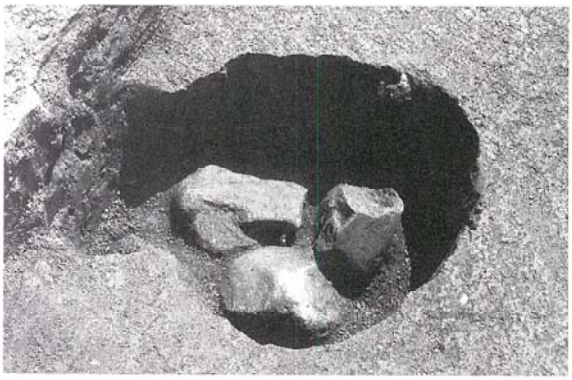
3トレンチ

4トレンチ

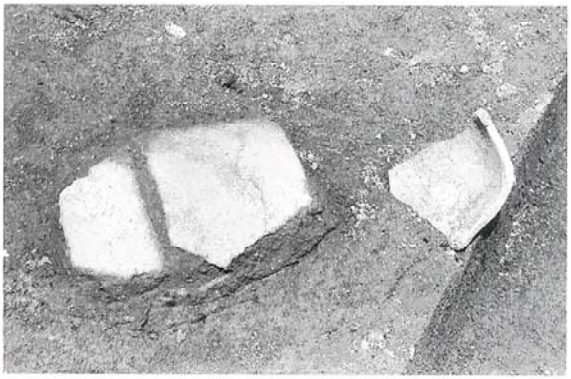
図版6　問答山遺跡（1）



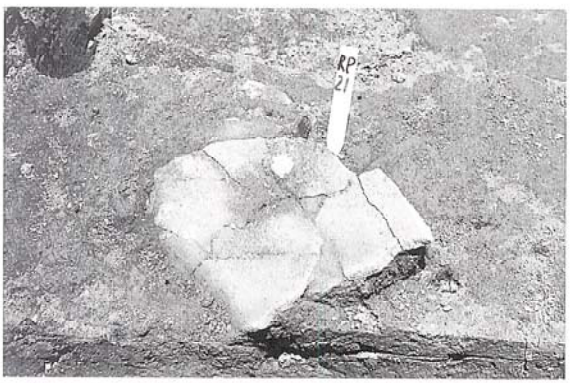
1号住居跡　完掘状況



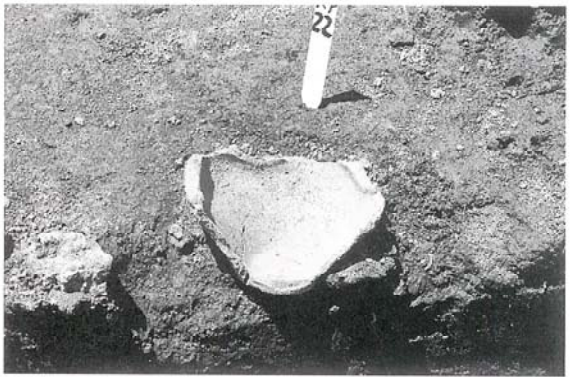
P 4 礫検出状況



土器出土状況

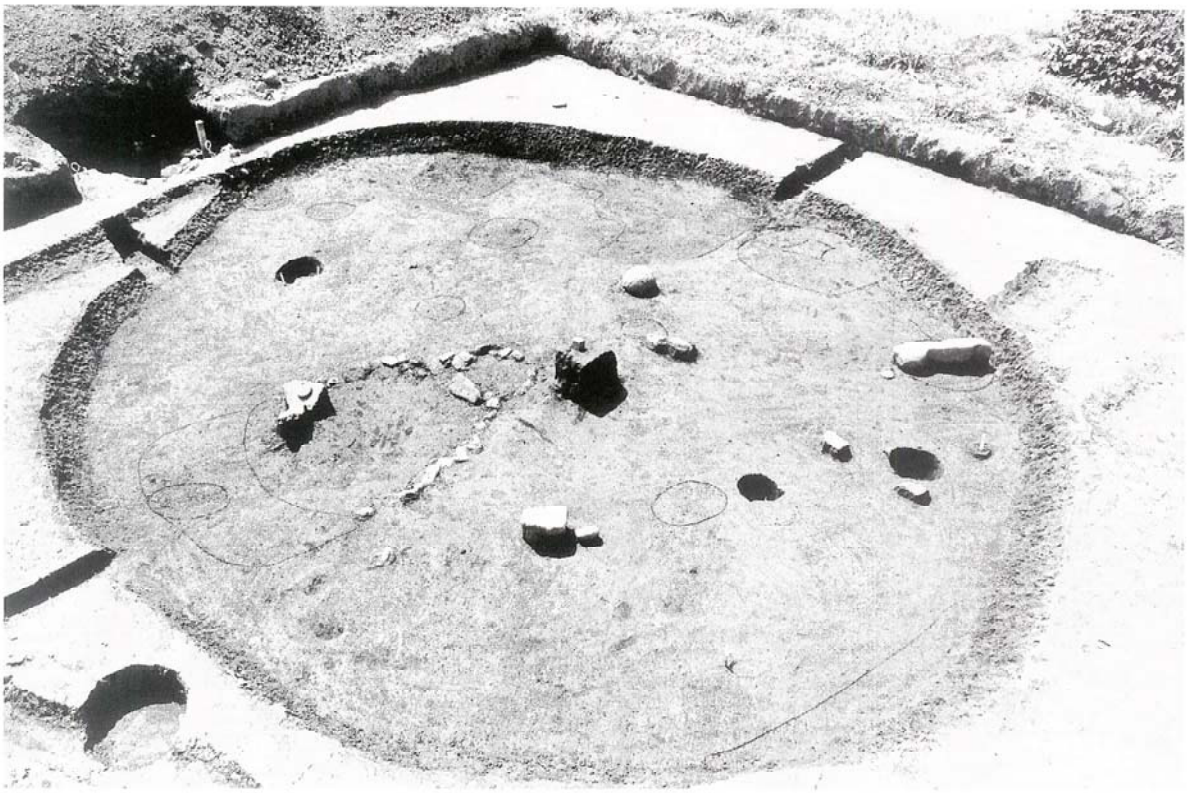


土器出土状況



土器出土状況

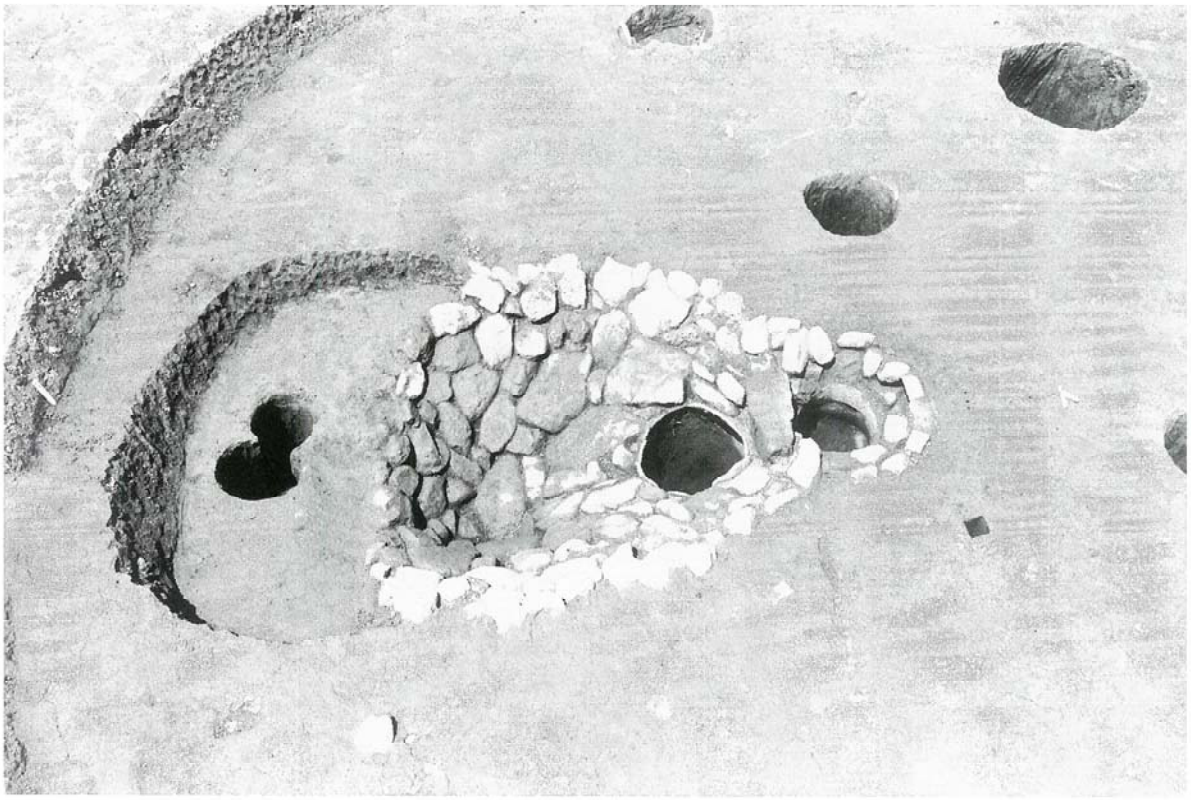
図版7　問答山遺跡（2）



2号住居跡　検出状況

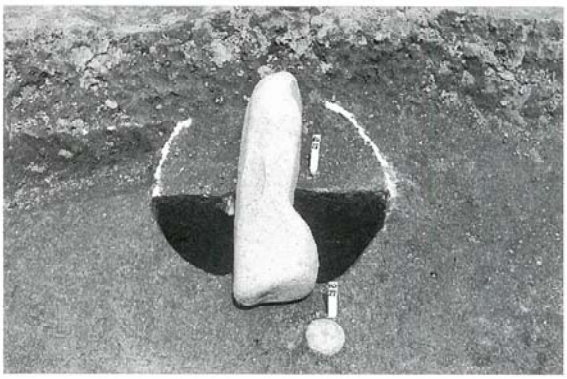
2号住居跡　完掘状況

図版8　問答山遺跡（3）



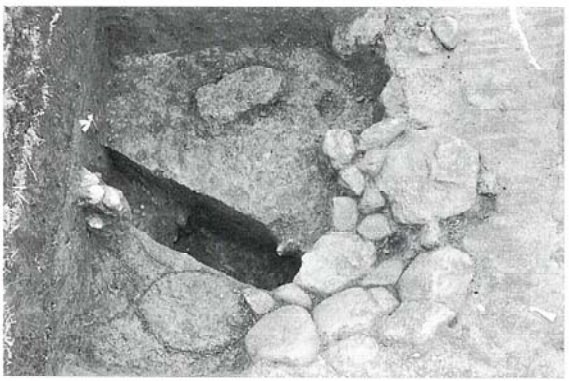
1号住居跡　複式炉完掘状況

1号住居跡　複式炉断割状況



3号土坑石柱出土状況

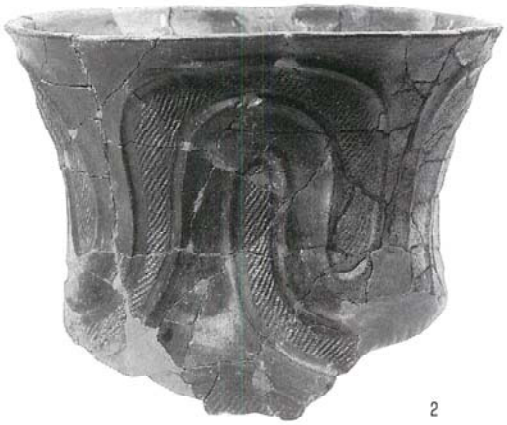
3号土坑小型土器出土状況



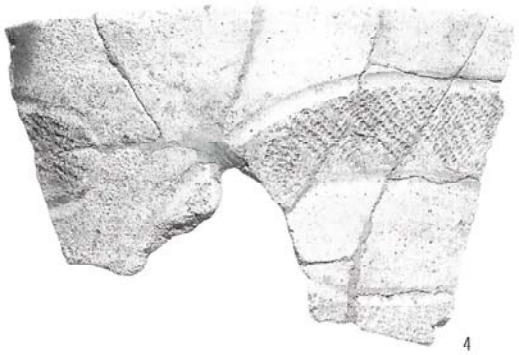
1号炉跡検出状況

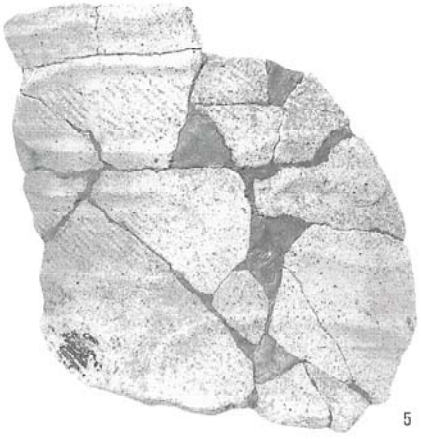
図版9　問答山遺跡（4）

1


2

3


4


5

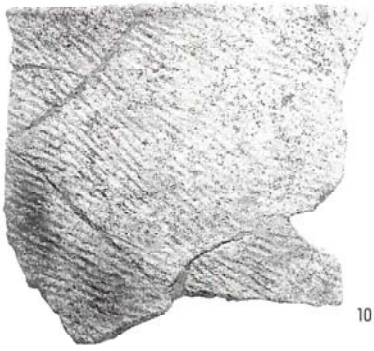
6

7

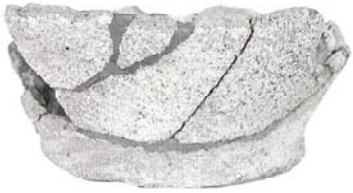
図版10　問答山遺跡１号住居跡出土土器（１）

8

9


10

11

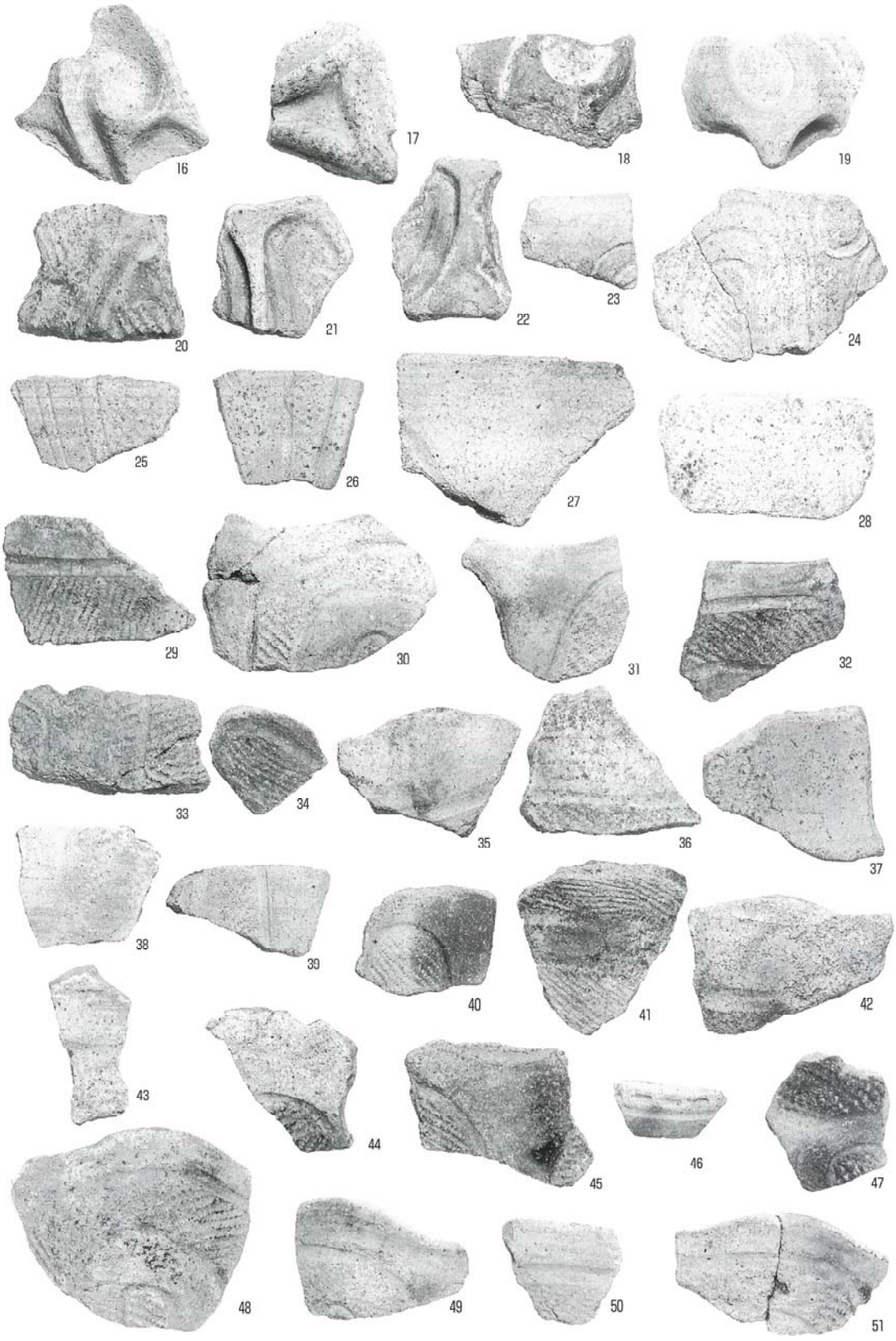

12

13

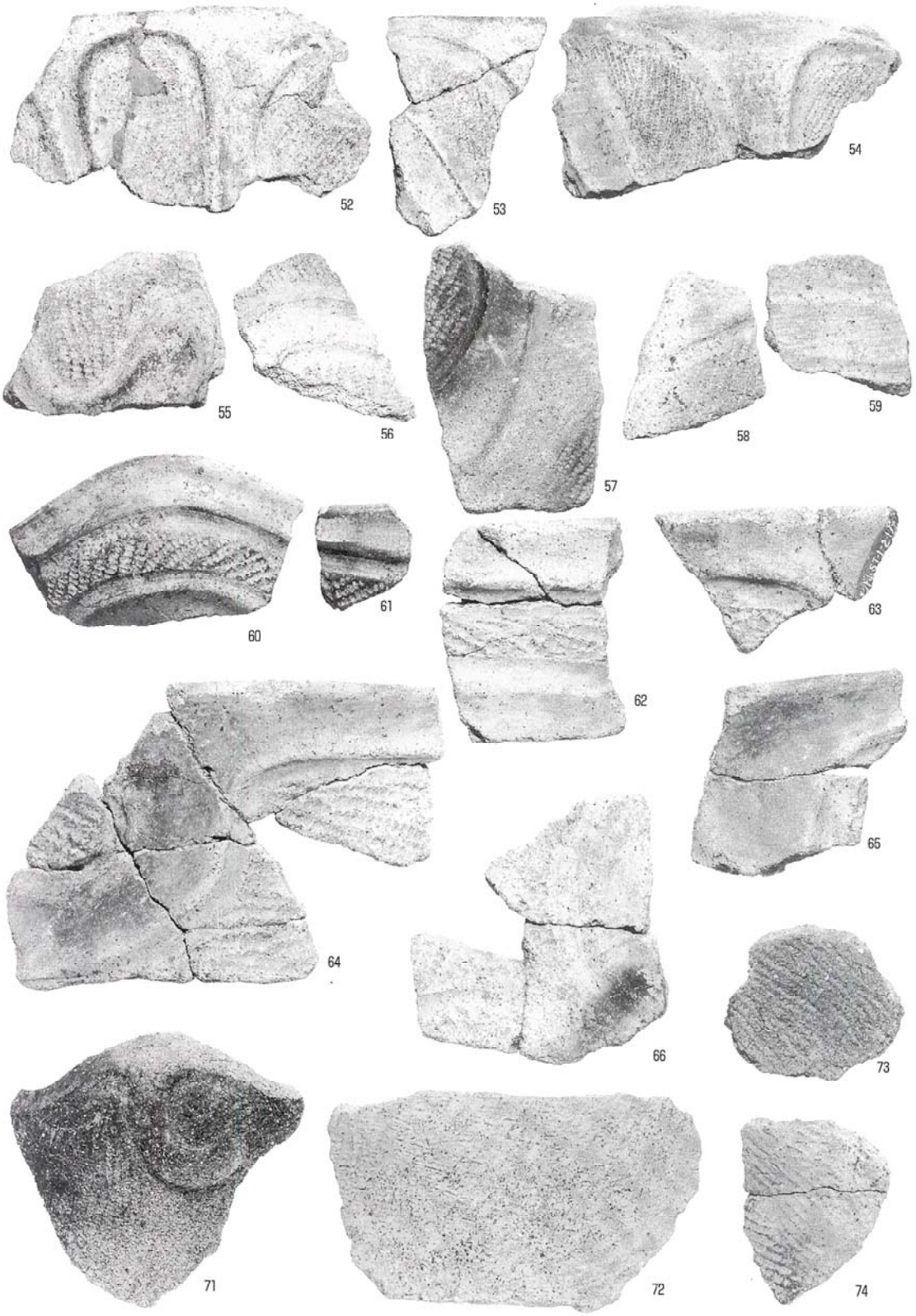
14

15

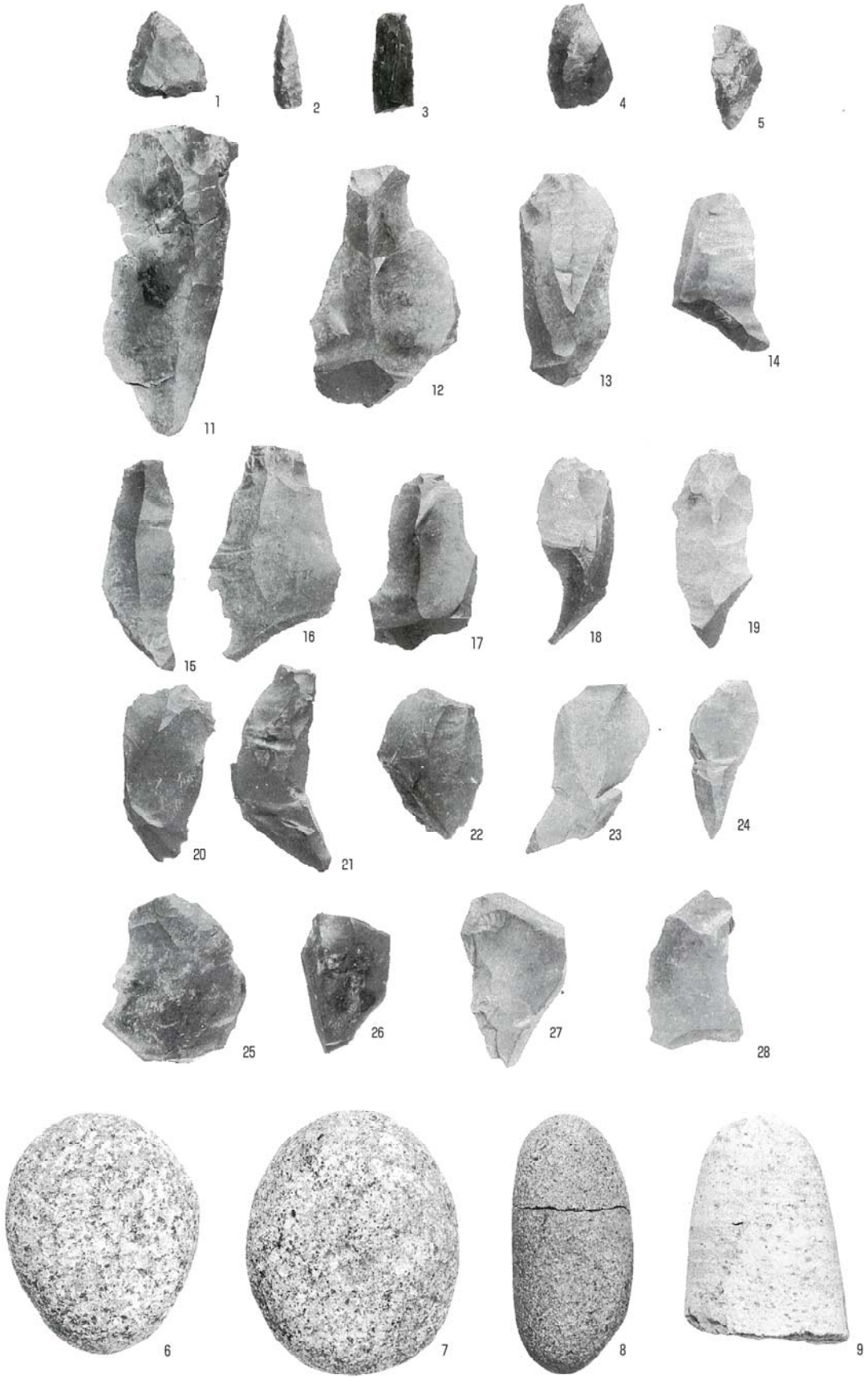
図版11　問答山遺跡１号住居跡出土土器（２）



図版12　問答山遺跡１号住居跡出土土器（３）



図版13　問答山遺跡１号住居跡出土土器



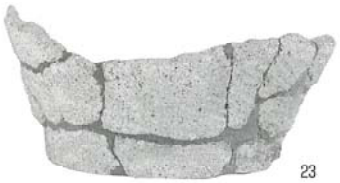
図版14　問答山遺跡１号住居跡出土石器

1

2

4

3

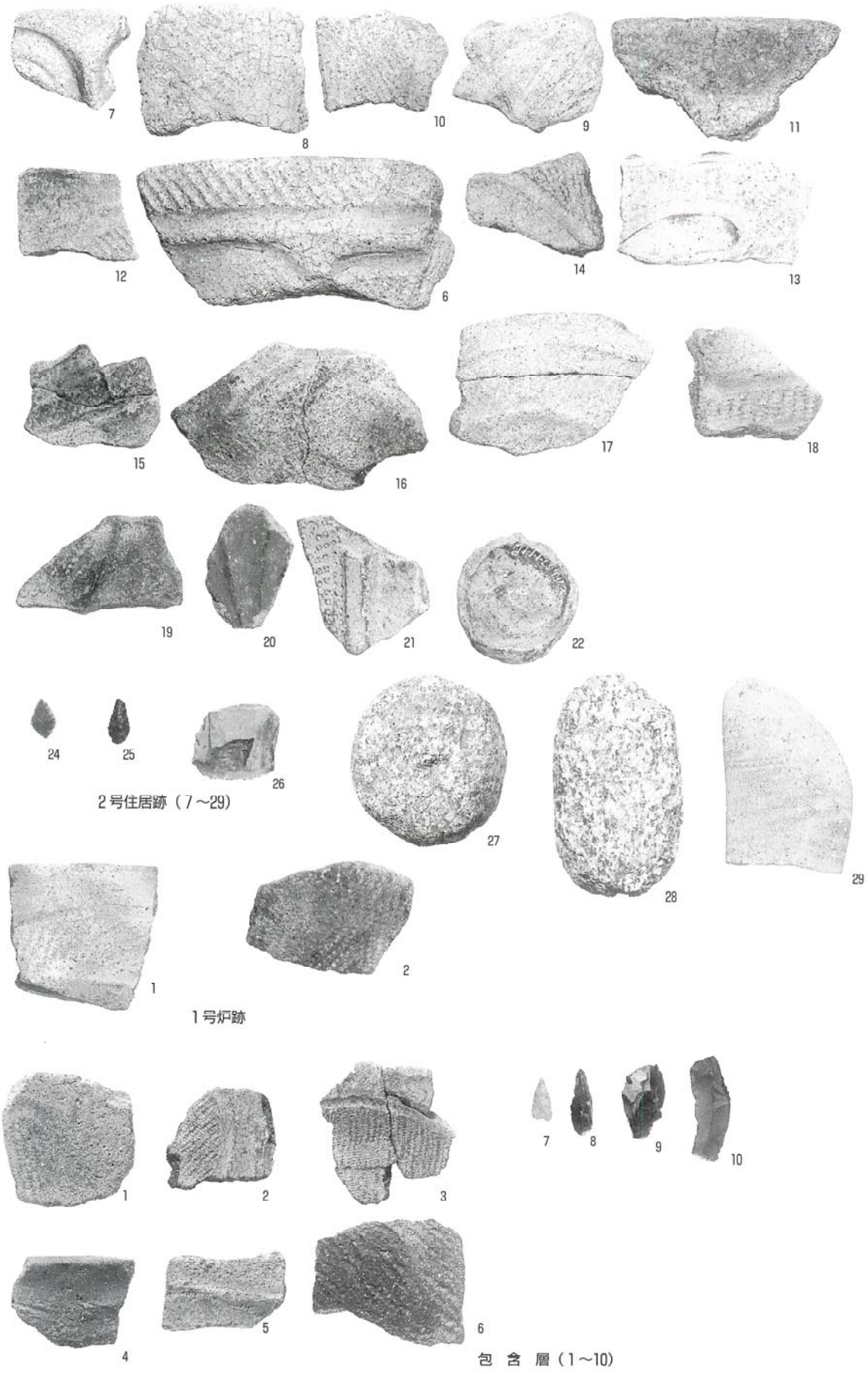


23

30

（3号土坑）

図版15　問答山遺跡2号住居跡出土土器



図版16　問答山遺跡出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	市内遺跡発掘調査報告書
副 書 名	問答山遺跡の調査、塔ノ下遺跡の調査　他
巻 次	12
シ リ ー ズ 名	山形県長井市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第24集
編 著 者	岩 崎 義 信
編 集 機 関	長井市教育委員会
所 在 地	〒993-8601　山形県長井市ままの上５番１号　TEL0238-84-2111
発 行 年 月 日	西暦2004年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査要因
		市町村	遺跡番号					
問答山（もんどやま）	山形県長井市（やまがたけんながいし）勧進代字岡（かんじんだいあざおか）	6209		38度08分49秒	140度01分08秒	2003.05.20～2003.06.12	136㎡	遺跡台帳整備
塔ノ下（とうのした）	山形県長井市（やまがたけんながいし）成田字塔ノ下（なりたあざとうのした）	6209	新規発見	38度07分22秒	140度02分45秒	2003.11.26～2003.11.27	280㎡	遊技場建設造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
問答山	集落跡	縄文時代中期	竪穴住居跡、炉跡	縄文土器、石鏃、掻器、削器	
塔ノ下	集落跡	奈良・平安時代		須恵器	

長井市埋蔵文化財調査報告書　第24集
市内遺跡発掘調査報告書(12)

平成16年３月31日発行

発行　長井市教育委員会
山形県長井市ままの上５番１号
ＴＥＬ（0238）84－2111
印刷　ダイヤ印刷所